（表紙）

「　　　　　　　　　此書ハ和漢蚕の

　　　上垣守國　著　　始り并諸国

　　　　　　　　　　　蚕養ひかたの秘事

　　　　　　　　　　絵すかたにあらハし

　扶桑国

　　養蚕秘録　全部三冊

　第一産

　　　　　　　　　　歳々上作の飼ひかた

　　　　　　　　　　　益ならんことを

　　　　　　　　　　　　　しるす 　　　　」

養蚕秘録序

五畝之宅、樹之以桑者、古先聖王、所以安養斯民之制也、夫、桑蚕之有益于民、其功固大也、故自古至今殖養之者尤多矣、然不精知所以殖養之之法則不能為其用也、吾国養父郡蔵垣村ノ里正上垣守國、有慨乎此以奥州之蚕甲於諸国向者不遠千里而往、淹留多日、察其水土之宣ヲ学テ其殖養之法而帰郷、以気多郡納屋村之水浜与奥州之壌地相似居其地構、以其所学之法植桑養蚕、共能繁殖、因造蚕種以販于国中人皆以為良種也、和漢桑蚕之権輿、及其殖養之法、諸書者所親聞見者編彙輯録以為三巻、名曰養蚕秘録欲、以公于世使衆人精知其法也、示予需序、余見而喜、四方之国養蚕之地人雖已知其法、苟因此書而、極其エ之蜜則可益無疎漏、未養蚕之地人雖未知其法、苟亦因此書而求其工之法則可能成調理可謂両得焉、然則絹絵綿糸之広適于世用豈不多於前日乎

亦助王政流沢之ー端也、頃日刻成為書巻首以環云。

　　享和二壬戊年孟春

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　出石文学桜井篤忠識

　　　　凡　例

一、此書に載する養蚕の原始故事等（、和漢史冊に拠て輯録し、予が憶見を加ふるにあらず。書中若□□畳あらバ、是を訂し給へ。本朝蚕神の伝記は、神代の巻を証とし、且神道者流の伝説に随ひ記す。亦養蚕の法ハ多年諸国回歴し工拙を攷、悉に口授を需め、敝家に探み、不利を除き、宜を挙、且婦女見易からん為、画図に顕す。巻中図説ハ、童蒙の為に諭す。又蚕の字ハ音忝にして蚯蚓也。俗用ひて蠶の字とするハ非也。然ども誤り用ること淹し。襲て俗に随ふ。余ハ皆此に倣へ。得失を演て安民ならしめ、高雅を要とせず、蚕業此書に拠らバ家を興の益あらん歟。覧者杜撰を陋することなかれ。

享和壬戌秋八月

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　但州大屋

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　上垣守國識

養蚕秘録上巻

　　目　　録

　日本蚕始りの事

中華蚕始りの事附こ四楊泉屠賦之解

　蚕の異名并蚕数品ある事

天竺霖異大王の事附り蚕居起異名の事

蚕連見様の事

　同毒忌の事并貯様の事

同寒水に漬る事

桑の種植様の事

桑を作りて益ある事

桑接木仕様の事

同取木仕様の事

同虫送りの事并二桑の病除る事

　飼蚕諸道具の図解

蚕に油断すべからざる事

蚕連并二蚕に鼠の用心すべき事

　　　　　　附り鼠を防ぐ事

蚕毒忌の事

養蚕家造りの仕様并屋敷善悪の事

（図１　天地のはじまりの図　天地のひらけし神のみことのり　ちとせの秋はわか君のため）

日本養蚕始之事

本朝尋於養蚕之起原、天照太神在於天上日、聞葦原中国有保食神、宜爾月夜見尊就侯之月夜見尊受勅降已到保食神許、保食神廻首嚮国、則自口出飯、又饗海則鰭広鰭狭亦自口出、又嚮山則毛驫毛柔亦自口出、夫品物悉備貯之百几而饗之、是時月夜見尊忿然作色日、穢突鄙突寧可以口吐之物敢養我乎、廼抜剱撃殺、然後復命具言其事、中略是後天照太神復遣天熊人、往看之是時保食神実已死突唯有其神之頂化為牛馬、顱上生粟、眉上生蚕眼中生稗、腹中生稲陰生麦及大上豆小豆、天熊人悉取持去而奉進之、中略、又ロ裏含蚕便得抽糸、自此始有養蚕之道云々、以上神代巻取要、此章ハ人事ヲ以テ造化ヲ明ス、天人唯一神教仰も余アリ、

かくあれば、養蚕の道は既に神代にはじまり、稚産霊目神蚕を飼ふミちを教たまひ、保食神は眉つくりましまして、。糸ひくの道始てありしとなん。眉に生ずるとは、まゆハ蚕の眉に似ればかくいふにぞ。蚕の口より糸を出すを見て、糸繰道も始りしとなん。又稚日女尊、斎服毆にいまして、神の御服を主どらせ給ふとかや。故に此御神を、糸綿すべて、衣服加護の御神と崇め奉る。又神の御教なれば、織殿へも不浄の事を甚忌嫌ふなり。

龍雷神人幸大秘訣云

保食神の古跡は、日向の国のよし。元来五穀の霊神御食津にましませば、何国にも有らん歟。其炳焉たるは、但馬国に鎮座まします養父大明神なり。初めは水谷大明神と号。初めて養父崎てふ所に垂跡し給ひ、農器を製し給ふ所を銕屋といふ。新墾の所を土平といふ。今は土田といふ。八木の出来し所を米地といふ。蚕の糸をとらせ給ふ所を糸井の郷といふ。此神の頂きに牛馬生れりとぞ。此故にや、但馬は日本最一の牛を産するなり。又此社を養蚕の御神なりとて、国中の民糸綿を初穂として捧げ、祈祷なすも宜なり。又広前の小石を戴き帰りて、蚕の傍に置て鼠を除る守護とす。是を猫石といふ。此御神、最初降臨の地を大養父と号し、三月在せし所を三月野といひ、神去給ふ所を大塚といふとかや。

因云、此御神は、狼を使令とし給ふゆへに猪鹿出て作物をあらす時、此社に詣て作守の御璽を請帰り、田畑の側に立置は、狼来りて守る故、猪鹿作物をあらさず、其事済て璽を帰し納れば、狼も立去るなり。又参詣の節、狼をつれ帰らんことを願ヘバ、其人の後につき添来る事、あまねく人の知れる所にして、農業を守らせ給ふ霊験斯のごとし。

又同郡建野屋といふ所に在す斉大明神と申ハ、天熊人神なり。其末社に天村君社、澳津彦命、澳津姫命あり。此神は、煮焼を教給ふ御神なれば、祭るも宜なり。

又丹後国かうもりの里は、始め太神宮御垂跡の地にて、丹波但馬とも元ハ一国也。後世三ケ国に分つ。国民蚕業をいとなミ、絹を織て産物とす。

又丹波国大原神社は、伊弉冊尊を祭る。爰をも養蚕の神なりとて、大多く詣で小石を戴き、鼠除猫石といふ。古き句に八大原さし下向おのく猫抱いて

旧事本記云、天殊棟命の姉市子魂姫命を以て天養媛と定め、天豊岡を開き、桑をもつて蚕を飼しむと云々。

（図２　雄略天皇の后養蚕の図　人皇廿二代雄略天皇の后、桑をもつて自ら蚕を養ひ給ふ事日本紀に見へたり）

（図三　天子に桑の葉を献上する図　時しあれハ民の草はももらさしとめくみの露を君やかくらん　副長朝臣）

人皇三十二代用明天皇の御宇に、聖徳太子万機の政を輔け、民を憐ミ、養蚕の術を教へ給ひし事、旧事本記に見へたり。

太子日、蚕を養ふは、父母の赤子を育つるがごとし。蚕を思ふ事我子を思ふごとくせよ。寒暖〈サムシ。アタヽカ〉陽気の加減平生我身分に倣ひて、温〈アタヽカ〉ならす、冷〈ヒヤヽカ〉ならす、平和なる様陽気を廻らし、昼夜間断〈ヒマ〉なく精力をつくすべしとおしへ給ふ。

古の賢王恵ミを万世にたれ給ひ、民の産を制し、后妃みづから桑を採り、養蚕の道は、婦人の業たる事を諭し給ふ。貴き御身だにかくせさせ給ふ。況しもつかたの者をや。もつはら励ミ務めずむば有べからざる業なり。

中華蚕始りの事

中華にては、伏犠氏の時、始て蚕の糸をなすとかや。又准南王の蚕経には、黄帝の元妃西陵氏手づから桑を採りて、飼蚕をし給ふよしをいへり。

礼記月令

是月也命野虞、毋伐桑柘鳴鳩払二其羽、一戴－勝降于桑、具曲植篷筐、后

妃斉一戒親東郷躬桑禁婦女、毋観省婦使以勧蚕事、既登分繭称糸効功以共郊廟之服、毋有敢惰

此章は三月になれば、野虞とて山林田畑をつかさどる奉行に仰せて桑柘〈クワ〉を伐すつることを制せらる事なり。又鳰の翼をうつ時節に至れば、蚕の出るに程ちかし。また戴勝といふ鳥、俗に菊いだゞきといふ。此鳥の羽、うるハしき織ものを見るがごとし。其鳥桑の樹に宿らば、早く蚕を置く所の棚、あるひは松蓋薦藁だやうのものそれくに用意せよといふ事なり。

（図４宮中にて蚕を飼せ給ふ図）

もろこしにても、むかしは天子の后すら潔斉し給ひ、みづから桑を採りて蚕を飼せ給ふなり。又養蚕の間は、婦女を禁しめ、粧ひをつくることも停止せられ、其余平生婦人のすべき手業までことごとくこれをはぶきて手抜なきやうにし、繭になれば糸をとらしめ、をのをの其いさほしを效へ、それぞれに賞じ給びて励し給ふなり。

普楊泉蚕賦云

凡物の生を受るといふは、唯是陰陽の気和し交りて生ずるなり。卵にて生

ずるものは、みな纏綿して自然に其気内にこもれり。就中蚕は其功大ひなり。上は天子后妃の盛服となり、下は庶民の服となりて、貴賤の品を分つ。こゝをもって王者たる人、その功をたつとみ、三官夫人世婦の潔きものをめして、宮中にて養蚕の法を学せ給ふなり。

二月になれば、庶民に令〈いゝつけ〉して蚕を飼しめたまひ、又中春庚午日蚕神を粲ることあり。又種は清浄なる座敷のうへにつり、是に蚕母といふて、心正しき婦人を附置、これを守らせ給ふとかや。

三月に至れば、種をさらし、中の日に水にて洗ひごみを去り、又陽して温にし、蚕室を作り、蚕の生るゝをまち、時至れば東方にてしつなき柔桑を採らせ、其用意をなさしむ。また眠り前は桑きびしくあたへ、起る時はゆるくとやしなひ、蚕蟄くと見ゆる其形仰ぐ時は、龍の雲井を望むに等しく、伏す時は、虎の跪るに似たり。身を円にして、夜はしづかなり。朝日を受れば、たちまち登天の勢ひを存す。又巣にかくれんとする時は、柴や薪をもつて席を作り、温なる蚕室に入れ、夕日の陽気をふせぎ、既に盡く繭となれば、蚕神に御酒を捧げ、家内は更なり、近隣の者までもうちよりて寿ぎをなす。蚕室にも風を入、まゆをかハかし、又蚕母もはじめて髪を結ひ化粧などし、又まゆかたくなるをまちてそれぞれの器に入れ、かの柴や薪につきしまゆをはづす。

　　　（図５　寝廟へ繭を献じ給ふ図）

此おりからは最はや何のわづらひもなく、みなみなうたひたハむれもてぃとなむ事になん。又

此月に帝は、大牢といふ礼を行給ひ、寝廟といふて御先祖の御廟に繭を献じさせたまひ、其後糸をとらせたまふ。又后妃は三盆といふ丸き篗に糸をくりたまひて、夫人世婦なんどいへる数多の宮女達にもおしへいとなませたまふ。夫より下つかた民の婦女にいたるまで、農事の暇に蚕を養ひ、織縫の手業をして、老たるもの帛を衣、飢す寒ざるは、偏に此道によればなり。

神蚕の異名并蚕数種ある事

永嘉記日、永嘉に八種の蚕あり。

〇蚢珍蚕　是ハ三月にまゆを作る　○柘蚕四月初にまゆ作る

按ニ山桑の蚕歟

〇蚢蚕　四月初にまゆつくる　　　〇愛珍蚕五月にまゆをつくる

〇愛蚕　六月末ニまゆ作る　　　　〇寒珍蚕七月末にまゆつくる

按ニなつこなる歟

Ｏ四出蚕九月初にまゆつくる　　　〇寒蚕十月にまゆをつくる

〇蚢珍蚕は三月にまゆを作り、娥出ること至て早し。卵を産ミ七日めにして蚕生ずといへり。

〇愛珍蚕は蚢珍蚕の卵を紙に産せ、器に入れ、上を張り、水入らぬ様にして水中に漬置き、蚕遅く出るやうにする也。

〇愛珍蚕のまゆより蛾生し卵を産む。是を愛蚕といふ。

雑五行書日、今世に三度俯し一度生する蚕あり。又四度俯再び生ずる蚕あり。又頂白き蚕あり。又頡石蚕、楚蚕、黒蚕、灰児蚕、秋母蚕、秋中蚕、老秋児蚕、秋未老獬蚕、鏥児蚕等の数品あり。凡蚕に大小の異品あり。大の蚕は荊桑、魯桑にて養ふ。小の蚕ハ薄き和桑にて養ふ。若誤て小の蚕に荊桑をあたふれバ、腹を破るの患ありといへり。

杜陽編日、永秦中の弥罹国碧金〈ミドリコガネ〉糸を貢〈ミツギ〉す。其国に桑あり。枝はびこりて地を覆ふこと、大桑ハ十余丈、小なるものは五六丈、其枝に蚕あり。長サ四寸斗、其色金色なり。糸は碧色にして其儘置は壱尺斗、これを曳ば壱丈にも延るといへり。

（図６　卵の形図　卵の形　最初生れ出し時の形　三日めの形　六日めの　形十日めの形　）

（図７　蚕の形図　廿めの形　船の形　庭の形　白蚕　黒蚕）

和漢三才図会日、中華陰山、峨眉の二山は雪積で歴世消ず。其中に蚕あり、雪蚕といふ。大サ瓠の如し。

又水蚕あり、員嶋山に生ず。長サ四寸斗、黒色にして鱗角あり。霜雪を覆ふ時に繭をつくる。長サ六寸斗。五色の糸を生ず、此糸にて織れる所の錦を文錦といふ。水に入れて濡れず、火に人て焼ず、奇妙の糸なり。むかし堯帝の時、海人これを献ず。其地合かろく暖にして和らかなり。これも雪蚕の類なり。

又石蚕あり。山川の水中に有て石につきて生ず。まゆ多くつくる。釵股のごとし。長サ壱寸斗、其身を覆ふ、其色泥の如くにして、蚕其中にあり。春夏羽生して小き蛾となり、水上を飛廻る。又海蚕あり。南海の岩の間に生ず。形拇

指の如く、其沙白粉のごとし。真なるものを得がたし。

又胎生とて蚕にて生るゝものあり。母と老を同じうす。蓋し神蚕なり。

又日原蚕を晩蚕といふ。又夏蚕といふ。或は魏蚕、熱蚕といふ。是皆夏蚕の異名なり。是は弐番の蚕にて、再び繭を作る。周礼に原蚕を禁ずるハ夏蚕を飼ヘハ一年に桑葉を二度採るゆへ、三度めの芽だちなり。桑樹大きにいたみ損ずるによつて、夏蚕を禁ずと也。今本朝に専ら飼ふ所の白繭蚕は四度眠り、四度起き、日数凡三十七八日より四十日余にしてまゆをつくる。

（図８　繭より蛾出る図　うじ虫　まゆの形品々）

（図９　蛾の雌雄を撰分る図）

蚕の項に国字のいの宇あり。

又黒斑色の蚕あり。又黄なるまゆを作る蚕あり、これをきんこといふ。

又片夏といふ白き春蚕あり、三十日余にして繭作る。是（まゆの皮薄く糸もよハし。十日余にして蛾生す。是夏蚕の親なり。此まゆにて娥を出し、夏蚕の種を取り、又夏蚕にて種を出せは、明年の春片夏といふ白蚕の種出る。

凡繭に長短丸角尖等の形有。蚕まゆと成て、日数十七八日にして朝五ツ時に蛾出る。雄は飛ふ、雌は俯して静なり。是を撰分て交合させ朝五ツ時より昼ハツ時まで合せ置て引はなし、雄は捨て、雌は尿をさせ、紙にのせ、卵を産せ、種となす。蛾壱羽にて、凡卵を弐百四五拾粒産といへり。因ニ本朝婚礼に雌雄の蝶を用る事ハ子を産む事いたつてすみやかにして、しかも胤の多きを祝するもの歟、猶識者に尋ぬべし。

雄は四五日過て死す。雌は二三日居て死す。又弱き蚕は、まゆの中なる蛹蛾に化しがたく、七八日を経て、長サ弐歩斗の黄色成虫と化し。まゆより出る　是を東国にてうじといふ。中国にてハころといふ。又ぼふといふ。此まゆは蛾出す。糸に取がたく、真綿となすなり。

按ずるに、異国本朝とも蚕の種類甚多し。しかれども当世専世上に養ふ所の白繭蚕に勝れるものなし。又諸草木の葉に皆蚕ありて、葉を喰ひ糸を吐く。然れども天下の衣服となるは、桑木の蚕の糸にしくものなし。故に今世上に、さかんに行ふ所の法をえらミて、養蚕の規範とす。その余の蚕はあげてもちゆるにたらず。

　天竺霖異大王の事

或書云、むかし天竺旧中国に霖異大王といへるあり。后を光契夫人といふ。一人の姫あり、金色姫といふ。后薨じ給ふて後、大王又新たに后妃を具し給ふ。此后妬ふかく姫をにくミて、父大王に讒言し、姫を獅子吼山といふ所に捨させ給ふ。しかるに、天の加護にや有けん、つゝがなくましまして、獅子に乗りて旧中国に帰らせ給ふ。よって又、鷹群山といふ所へ捨給ふ。此時多くの鷹ども来り、肉を供じて姫を育ミける。大王の臣下此よし遙に伝へ聞密に姫を供奉して都に帰る。后又姫の帰るを悪ミ、海眼山といふ嶋へ流し給ふ。此時、漁

夫姫を助けてもとの都に送ける。后大きに怒て、臣下に命じ、御殿の庭を深く堀て姫を埋め、殺させけるに、万其後土中より光明赫やきけるをあやしみ、大王堀らせ見給ぷに、。彼姫いまだ恙なくおハせしかバ、又桑の木のうつほ船に

乗せ、滄海へ流し給ふ。然るに、此船日本常陸国豊良湊へ流寄る。浦人これを助け、介抱しけるに、幾程もなく、彼姫空しくならせ給ひ、其霊魂化して蚕と成けるとかや。

此故に蚕初の居起を獅子の居起と云、二度めの居起を鷹の居起、三度めを船の居起、四度めを庭の居起といへるは、彼姫天竺にて、四度の難に遇給ひし事をかたどりて、かくは名づけし事とぞ。

　　　　蚕種子見様の事

種子は随分揃よく面一様にして生気強く、卵の中少しくぼミ、種の地合能しまり、蛾のはたらき種子のちらし能く、悪き臭ひなく、取扱に種落ず、紙に能取付しを最上としるべし。種を取に娥を撰分、悪き蝶はばくと名付て撰出し、蝶を上中下と仕分るなり。能蝶の種ハ高直なり。悪き蝶の種は下直としるべし。

　　　（図１０　種子見分る図）

尤種の色は、其土地の精気種に顕ハるゝなり。赤土地の桑にて養へは、種少し赤色と成、又黒土地の桑にて飼ふ時は、種少し黒ミを帯ぶ。真土地の桑喰し蚕の種は、桔梗色にして、種に少霜ふりしごとく見ゆ。然ば、種の色には。

かゝハらず、何国にても地面宜しき川筋の場所へ上桑を作り、或は刈桑又ハもぎ桑などにし、飼方の本法をもって養ひし蚕の上繭にて出し、蝶を撰ミとりし種を最上とす。其次の種を場脇ぶつ切又はきり種或はごろ種などゝ色々の異

名あり。又蛾の性悪しきをばくといふは、麦飯の色に似たるをもって名づけしとかや。性よき蛾は、白き飯のごとしといへり。

諸国にて上々まゆを取らんと思ハヽ第一種子の善悪を吟味すべきことなり。まゆ一ツの中に蚕ニツ三ツも一所に籠りし大まゆあり。是を糸にとる時ハ、ふし多く出来、糸甚悪し。よって是を除て真綿にとる。此大まゆにて取りし種子、国々より出ること夥し。此種子を求めし人は、翌年蚕不揃にして上作すること少なく、大まゆ多く出来る也。是をどら種とも又はごろ種ともいふ。色々の異名あり。

種は第一其年上々桑を喰せ、上作の蚕にて取し種極上と知るべし。少にても飼方に手抜ある歟、又ハ桑の宛ひに過不足ある歟、或ハ種元悪きか、又ハ其家に不吉ある歟、四度の居起に格別の寒暑に当る歟、風雨の時節に蟄き、まゆ作る歟、此等の事一ツにても障り有れば、其種蚕決て宜からず。随分種元を吟味して上種を求むべし。愚成人は此理をしらず、蚕の善

悪は、年の廻り我運なりと心得る人多し。是大成ひがことなり。

　　　　（図１１　蚕種貯ひ置図）

蚕に限らず生あるものは猶更なり。一切の草木迄も皆親に似るもの也。譬ハ、渋柿の種を植て甘き柿は生ざるが如し。又年の廻りによりて、悪種にても相応の蚕を取る人も有べけれども、是は其年の廻りにて、悪種にてさへ相応の作をすれば、況や上種を求て飼ハヾ、一段格別の上作すべき也。乍然、種子ハ甚見分がたきものにて、口伝多し。四度の居起ふり、桑責桑少しの間にも大なる損益あるべき事也。

　　　蚕種毒忌同貯様の事

種子求て後は、紙袋に入れ、気の籠らぬやうにして、夏より翌年の春まで冷しき所へ釣置べし。種に第一油気、塩気、多葉粉の類、銕のるい、茶麻の于、樟脳大毒なり。又壁にかけ置べからず。或は蚊張帷子に包むこと大に悪し。行燈の上につりし種は、蚕出ずといへり。惣じてにほひ悪き物に人べからず。日の当る所、焼火の近所へ置事悪し。都てあしき匂ひを忌む。

　　　種子を寒水に漬る事

種を寒水に漬るは、第一毒気をぬくため也。

　　　（図１２　種を寒水に漬る図）

又一説に、性弱き卵は生れず性強きもの斗出る故、蚕生気つよし共いふ。又明年五月北風の時、痛少しといへり。所により漬ざる国もあり。

水に漬る時は、大盥に清水を入潰べし。国により寒丗日漬る所もあり。又節分に一夜漬る所も有。寒つよき朝は種氷に閉合ものなり。其時は、昼九ツ時に日和能を見て、種をあげべし。竿などにつり日陰にて晞すべし。

　　　　　桑子植様の事

何国にても、蚕を畜んと思ハヽ先桑を作るべき事肝要なり。桑の木ハ、葉太きにして円く能茂り、葉の面に光沢ありて、木の色白く生立能桑最上也。此桑を中華にては、魯桑といふ。又莖少く葉に股有て、子を多くむすぶ桑を荊桑といふよし、農業全書に出たり。又一説に、桑は桑柘と続ひて、其実桑に似て葉大なるものあり。俗に是を野桑ともいふ。桑と一類にして別物なり。山中に有るつげと訓ずるは、非なるべし。

又国々にて桑の異名有。中国にては、魯桑を真桑といふ、葉少き荊桑を、山椒の葉に似たりとて、山枡桑ともいふ。又東国にては、新田わせ、やなぎ田わせなどゝ、色々の異名あり。又上桑の実を種に取りても悪き葉の桑多く出来

るものなり。上々魯桑を作る仕法は、能き桑を見定、五月中の前桑の実黒く能熟したるを撰ミ、種に取べし。

　　　　　（図１３　椹とる図）

椹は木の本生は悪し。末生を種に取て、椹の両端を少宛切捨て、正中を種に取べし。実の跡失ハ悪桑と成、是口伝也。手桶に水を入て、能洗ひ、濁る物を捨、底に沈しを取、直に灰にかきまぜ、土地燥き、能上田に土を穿、麦まくごとくがんぎにして薄く蒔、直に土を少しふりかけ、糞をいたし置べし。卅日斗して生出る也。

　此時最初に生出しハ、皆引取捨、跡に後れて生出しを、程能残し置、是に度々糞を人べし。其年の十月頃には、三尺斗に成長すべし。又早く生出、或は根の皮赤色の物は、悪桑なるべし。一段遅く生立、根の色白き桑、是を上々魯

桑としるべし。右の上桑苗を翌年の春彼岸の頃に、地より五六寸上を切て上田に程能植、芽立時壱株に若芽壱本宛育作るへし。段々成長するに随ふて、苗の葉付の所より若芽多く出る。是を盡く闕き取りて、真壱本を育つべし。又

葉に青く小き虫つき、桑の新葉をまく事あり。是を念入盡く取去べし。然ざれば、桑痛むものなり。

　　　　桑樹を作り益ある事

世に四木三草、五木八草とてあり。

（図１４　桑苗栽る図）

桑は四木の一に口にて名木なり。桑の作り様は、屋敷廻り、岸の上、或は畑、惣じて耕作もなりがたき土地に栽て、生立木なり。又川端水ばねに植て川除

やらひともなり、土地は、砂地又真土地よし。水気あるごみ土に栽れば、少しの間に成長早し。養蚕の秘事を覚し国々は、或ハ荒地荒野を闢き、川縁、山奥にうへ置、幽谷辟地といへとも、蚕幸養ひて莫太の利潤を得る事多し。

尚書大伝云、天子諸侯必公桑蚕室ありと云々。夫蚕は、何国にても、多く女の業にして、男子の手を費さず。耕作の余力に務て、しかも大金を得る事、誠に農民助成国家を潤す第一たるべし。異国にても、五畝宅樹之以桑すといへり。然るに、いまだこれをせざる国は、荒地多く、無用の草木生茂り、徒に空

地と成は、歎しき事ならずや。

然れども、蚕は飼方に秘事多く、至てむつかしきものなれば、養育の口伝をしらず、いたづらにせば、大なる損失あるべし。又飼方功者の人は、年々に利徳を得、其余力にて田畑多く持、あるひは荒地を開きなどして、富貴百倍なるべし。一家すら猶斯のごとし。況や一村一郷かくの如くなりせば、富四方に溢れて、国の豊なる事春和のごとく、誠に理世安民の急務と謂つべし。

桑接木仕様の事附り桑に霜ふる事

桑接木の仕様ハ、彼悪桑を前年に見立置て、接だいとすべし。

（図１５　接木する図）

三月頃芽少し出し時、木を地より弐三寸上を切、上々葉の枝を接べし。尤接だいの精気能き方へ接べし。接穂にも裏表あるべし。是を違はぬやうにすべし。又至て木の末は悪し。其故ハ木の梢ハ中に真有て性弱し、枝の勞ひつよき所を接べし。接穂は東に向し枝は東に向て接ぎ、西に向しハ西に向け。是まで有し形に接べし。日覆をし、接口に水の入らぬやうにすべし。又取接或はなげ入接などゝ人いふ色々の接様あり。

今摂州山本と云所に諸木を接又はさし木の上手ありて業とす。又国々にも上手数多有べければ、其人に随て学ぶへし。

春八十八夜前後、蚕出る時分、大霜ふり、桑の芽いたミ枯るゝ事間あり。其時日陰の所は、自然と霜解、桑の精気もとへ復りし時分、朝日を請る故、桑の芽強く痛まず。又日請の所はいまだ精気の復らざるうちに、朝日照付、急に

霜解る故、若芽ゆだるが如く痛む也。其時は朝早く起、桑に厳く水を打かくれば、痛少しといへり。又桑の根を深く堀て下糞を直に入れるもよし。然る時は、痛し桑四十八時目に芽を出し、其年の蚕に用立べし。しかし霜桑は、蚕に毒なりともいふ。

　　　桑取木仕様の事

　（図１６　取木する図）

桑の取木は、随分能桑を見立植て、三年目位になるを、春に至り晴天の時、地より壱尺程上て切べし。切株より若芽多く出る。是に度々糞をすべし。翌年の春、彼枝を七寸程宛間を置き、若芽壱本ヅヽ残し、其余は欠き取り、彼枝の葉付の所を、少し斗爪にて皮をむき、疵を付、残したる若芽を皆上に立押付て、図のごとく深く埋め踏ミ付て、地を堅くしめ置べし。其年の十月頃までにハ、疵を付て埋し若芽の所より、根を多く出すなり。又疵を付ず、其儘埋る時は、根を出す事遅し。是取木の秘事也。

明年の春根を堀上ケ、鐘木のごとく壱本ヅヽに切離し、外に植かへ、是に下糞杯追々入れべし。是枝壱本にて、八九本にも成仕方なり。

桑の虫送り并桑の病を除る事

　　　（図１７　虫送りの図　虫おくりの事は日本紀に大已貴尊少彦名命と力をあハせ天下を経営たまひ、病をおさむる方を定め、鳥獣昆虫の災異を攘んために其禁厭法を定むとあれは、神代より遺風なるべし。

又もろこしのふミにも立夏の日むしおくりすと見へたらば、異国にもある事にや。）

　春に至り、葉茂たる時、葉に赤色なる病つく事あり。此病国々にて異名あり。中国にてハ、させといふ。若此病つかバ、早く棹をもつて払ひ取べし。其儘置ば、後程多くなり、蚕に大毒なり。又桑しらみといふ白き虫多出来、桑の葉痛む事あり。是も右のごとく払取べし。惣して、かくの如き病つく土地には、桑の根に煤の類、或は蕎麦売等の灰汁気有るものを置ば、病少しといへり。春蚕幼飼の時分、桑の木に尺とり虫といふ虫多わきて、桑の若芽を喰ひ、枯木のごとくなす事あり。

此時虫送りをするに、国々にて色々の法あり。中国辺は、蚕神に祈り又は産土神へ詣などし、藁人形あるひは藁馬など作りて、是に桑のむ

しを少し取乗せ、鉦、太鼓、或ハ螺貝、笛など吹立、子供童部大勢集り、桑の虫を送た沖のかたへ、行けくと囃子立、桑の辺を廻り、川ある方へ送り出す。是をむしおくりといふ。又桑の木にさめといふ病出来、木の皮紫色になり枯るゝことあり。是は雨天の節、竹のへら或はさゝらの類にて、磨とるべし。

　　　養蚕諸道具の事

　　　（図１８　道具の図　最初の篩、五六日目の篩、船の篩、八九日目の篩、箸、団扇、桑切庖丁、押切、羽箒、箕、採桑籠、手箒、蕢、蕢）

　　　（図１９　道具の図　てつき、同、桑とりふご、桑入網袋、蚕籠、藁だ、薦、薦、筵）

　　　（図２０　道具の図　棚竹、たなの木、蚕架、桑とり梯、ふミつぎ、縄）

　養蚕の諸道具は、図のごとくして、悉く冬の内に用意すべし。又繭作らす時につかふ藁の類、柴薪にいたるまで、前方に用意して、湿気なき様乾燥し置べし。

　　　蚕に油断すまじき事

　或里に、蚕を上に置き、下にて火をたき一時の間に大損せし人あり。心得べきことなり。むかし去所しや百性、苗代に籾種をまき居たるに、朋友来り互に田の畦に腰をかけ、休ミ居たりしに、思ハず長噺になり、昼後まて居て立別れ、夫より残りの籾をまき帰しに、朝蒔し籾は苗の芽立能、ひる後にまきし籾は、芽立甚悪かりしとかや。是は、三月の頃籾種を水に潰、其後苗代を拵へ、彼種を水より上、能程に晞し時、右の籾種悉く芽を出す也。此時を違ず田に蒔べきを、若芽の出し籾種を、田の畦に置き、日に干つけし故、若芽悉くいたみ、其年大きに不作せしとなり。

　　　　　（図２１　畔道で話をする図　畦ミちや　なハしろ時の角大師　正秀）

ましてや蚕は、生あつて食する虫なれば、少しの間にも変化有べき事也。蚕は掃初の日より、たとひ親類縁者たりとも、蚕飼ふ間ハ、音信の疎略なるをも、互に断置て、少も手抜なき様、大切に扱ふべし。纔四五十日斗のつとめなれば、昼夜心を盡して育つべし。

礼記月令云、禁婦女毋観省婦使以勧蚕事といへるも此心なり。然るに、愚なるものハ、十所にこぞりあひ、無益の長噺に時を移し、俄にあハたゝしく桑を取に走り、あるひは桑の拵へなど麁末にし、又は桑のあてがひにむらなどある歟’かやうに疎略の飼方して、不作なれば、年の廻り、我運の悪しき抔と心得るは、誠に愚の至り也。ケ様の事ハ蚕のミにも限るべからず。能々心得べき事也。

　神蚕種同蚕に鼠の用心すべき事附り鼠を防ぐ事

蚕種は、至て鼠の好物なり。鼠の通ハぬ高き所へつり置べし。六七月より寒の人までは別して風に当つべし。所によりて寒三十日種を軒に釣、風にさらす国もあり。家の内に鼠多く来らは、かよひ道にこんにやく玉をすりつけ置ば、鼠来らずといふ。又夏の頃は、螢を多く紙に包ミ、是を鼠のかよふ所に置ハ恐れて来らずといへり。又山に、むろの木といふ葉に針の有る木あり。是も所によりて木の名違有べし。是を道に置もよし。若かくのごとくしても止らぬ時は、鼠の通ふ所の

隅々に鼠の好物を食事に宛置べし。

斉民要術云

冬十二月、鼠の尾を切生置て、明年正月元朝、日の出ざる前に、其家主彼鼠の尾を切て、附勅屋吏制断鼠虫此呪文を唱へて家内を廻ればヽ鼠来らずおｙ・脳筒鷲嘩

准南万畢術云

狐の両眼と、狸の陰嚢〈キンタマ〉とすり合て、鼠の穴をふさげバ、鼠外へ行来らずといへり。

　　　　蚕に毒忌ある事

第一たばこの類、雀の糞つきたる桑、山椒の匂ひ、油気、塩気、漆の木、胡桃の木、杉の木の近所にある桑、牛馬の糞付たる桑、うなぎを焼事、惣して悪き臭ひの物焼べからず。或は、門前などを、悪き臭ひの魚肉又（糞など持通バ、急ぎ戸を閉べし。又蚕不浄まけとて、赤色になり、又（半身赤くなり、或は、俄にちゞけて死する事有。此時は急ぎ桃の葉を火にふすべてよしといふ。又甲州辺は、こくさぎの葉を採り、此汁をもミ出し、少し桑にかけて喰すともいふ。又極上の酒を桑に吹かけ、喰す国もあり。宜しきに随ふべし。

又云、蚕幼き黒子の時、長サ弐歩斗、横壱歩斗の虫多く出来、蚕を吸ひ殺す事あり。是を羽虫とも又黒むしともいふ。此虫多くわく時は、川魚又は海魚の鰭などを藁の苞に入、蚕の傍なる高き所につり置べし。彼黒むし、臭き匂ひに集り、苞へたかるなり。其時静に苞を取、遠き野辺に行、虫を払ひ、又元の所へつり置、幾度も取べし。元来、此むしは、寒き年にハ少し。暖気成年に多し。是は、蚕の尻がへなど手抜あれば、

多わくなり。例年蚕出る前に、家内を能々掃除すべし。此虫掾の下抔のごミより生ずと見へたり。

　　　蚕家作仕様の事附屋敷善悪の事

家作は、第一暑湿を除る様に、高く作るべし。空に風抜の穴又は窓多く明、東面北に戸を明べし。南は、少き窓をあけ、何れも戸の明閉自由にすべし。日の照りこむは、甚悪し。元来夜分ハ、四分の陽気醒て、朝五ツ過までは、至極涼しきものなり。昼九ツ前より、暖になり、ハツ時分より蒸々とほめくなり。西うけの家などは、別して夕日の火気に蚕をいため、大ひに損する事間々ある事なり。此家敷は、西の方へ樹木を植て、夕日の火気をふせぐべし。又寒きとて、蚕に屏風など引廻し、又は紙帳をはり抔し、格別風の人を止め、むさくとほめかす事悪し。

陽気は、昼夜時々にて替るなれば、家内何時も同様にして、養蚕すべ

し。惣じて、蚕に限らず、其道を業とするには、一心のはたらき肝要なり。春は苗代風といふて、時により北風吹、別して寒き事折々あるべし。蚕も幼き時は、寒さに痛むべし。又ほめきし神蚕ハ、庭起より性悪く成べし。又寒さにも痛ざる程のつよき蚕は、後無病としるべし。第一我家の陽気加減を覚る事、至て大切の事也。

養蚕秘録上之巻　終

　養蚕秘録中巻

　　　　目　　録

蚕神祭の事

蚕生れ出る時心得の事

最初椹を以蚕掃落す仕方の事

桑の若芽を以蚕掃落す仕方の事

蚕に大小出来ざる心得の事

心得違にて年々蚕不作したる事

蚕獅子の居起手入れの事

蚕架立様并蚕風を嫌ふ事

家内陽気加減の事

麕の居起手入れの事

船の居起手入れの事

庭の居起手入れの事

諸国にて繭作らす品有る事

糸取様口伝の事

蚕の善悪并病見様の事

　　　蚕神祭の事

　　　　（図２２　蚕神祭の図　古今集　とりものゝ霜やたひをけとかれせぬさかはきのたちさかゆへき神のきぬかも）

或人神道者に問云、諸国に蚕神と崇祭る神一体ならず、何れの神を祭りて是ならんと問ふ。答云、夫神は不測の徳を備ましませば、何れの神にても崇信至誠ならば、諸願に随て感応あらずといふ事なし。然といへども、今問に因て、姑らくこれを論ぜば、天照皇太神、保食神、天熊人神、此三神を祭りて、則

可ならん。天照皇太神、保食神は天地陰陽の神にして、太神は始め大日孁尊と申奉り、天上の道をしろし召給ふ。又保食神と申すは、陰にして地の御神なり。始め稚産霊尊と申奉り、又保食神、又倉稲魂命とも申す。此三ツの別号あるを以て、三宝荒神とも崇め奉るなり。凡人間はいふにおよバず、禽獣〈とり・けもの〉虫魚〈むし・うお〉艸木〈くさき〉迄も皆此神体より生出づ。

稲は、人の命を養ふ最上の艸なるが故に、稲魂の登ざる時は、万民飢餓に苦しミ、国家治まらず。　故に米といふは、世の根といふ略語なり。又米といふは、籠るの義なり。宝といふは、田からといふ訓也。

　　神代に神田を耕し、苗代に籾種の芽を出し、蒼々と生る時、稚産霊神主り給ふ。又苗を取神田に植耘育る時、保食神主り給ふ。秋に至り、既に熟る時は、倉稲魂神主り給ふ。又稲荷大明神とも崇奉りて、三義あり。苗代に籾の生出る時を、稲生大明神と号し、既に登て刈収る時稲荷大明神と申す。炊ぎ熟する時を、飯成大明神と崇祭る。皆同体異名にして、時々主らせ給ふ所の神徳によりて、斯号奉る也。五穀はもとより養蚕の通を教給ひて、邪風消除起伏繁昌を守らせ給ふ御神なれば、養蚕大明神と崇め祭るべきなり。

又養蚕に午日を吉日とす。午ハ時に取て、日中陽の満る時刻なり。殊更稲荷大明神を祭るにも、此日を以てすれば蚕業に吉日とするハ宜なり。又天熊人の神は、天神の勅をうけて保食神の許に至り、五穀の種、蚕の繭をとり伝へ、太神に捧げ給ふにより、世々に伝へ、万民凍餓〈こゝへうゆる〉の患ひなく、身を安んずるハ、此神の功なり。然れバ上にいふ所の三神の神恩を深く盧り、仰ぎ尊とミ給ふべし。

旧事本紀云

甲子日家内を潔め、戌亥の方に蚕神を祭り桑の枝を弐本立、桑の葉に繭餅

をのせ供じ、繭の形にしたる米の団子なり。神酒を献じて祭るよし見へたり。

史天宦書云

正月上申日東方より風吹けば、其年蚕よしといへり。

続斉諧記云

唐土に張成といふ大、或里の婦人、家の東南に蚕室を立るを見て、教て云、正月十五日白粥を供じ、蚕神を奠らば、蚕の繁栄常に百倍すべしといふ。婦人教のごとくするに、はたして利を得たりしといへり。

崔寔云

三月清明の節に、家内を掃除し、能浄め、四方の穴を塞ぎ、窓を張り蚕に用ゆる諸道具を取出し用意すべしと見へたり。

竜魚河図云

蚕の沙を家の戌亥の方に埋れば、其家の蚕必繁昌すといへり。

東方朔占書云

正月元日風吹ず、天気晴明なれば、其年蚕よしといへり。

蚕生れ出る時心得の事

春に至り、其年先出しにせんと思ふ種を、彼岸中日前後に取出し、気の籠らぬ様にして、鼠通はぬ高き所へ釣置べし。是も其土地の寒暖〈サムクアタヽカ〉にて遅速の加減あるべし。種の上下へ糸をつけて、一日替りに上下と釣替べし。其ゆへは、二階裏などハ上下わづかなれども、温冷の違ひありて、種の上になりたる所ハ早く青ミ、蚕早く出るなり。兎角一様になり、蚕も一度にさつと出る様に加減すべきこと肝要なり。何れのとしにても、八十八夜前後には、蚕生れ出るなり。此ときおそきとて、日の照る所に置き、或は懐中に入、又は夜着蒲団につゝみ、あるひハ火の近所に置き、急に種を暖め、無理に出さんとする事甚悪し。天性自然にまかせて、種に皆青ミつき、蚕少々出かゝらば、昼の九ツ時日の暖なる時を見合せ、種を取出し、白紙五六枚程にて是をつゝみ、又其上を抜出綿やうの和らかなる物にてざつとつゝミ、或は皮籠、又骨柳、ワらだ様の物に入、少し火気の行暖なる所へ上ケをくべし。

夫より一日に弐三度ヅヽ　つゝみし種をとり広げ、意気を入、又もとのごとくつゝみ、上ケ置べし。此時水気に触ること悪し。若雨天ならば、家内に火を焼き、少し温にすべし。薪は、松桑の類よし。悪き匂ひある木焼べからず。又近所にて煙草呑むべからず。取扱ふ事も悪し。蚕を手掛る度毎に、手を洗清浄にすべし。諸道具は、蚕出る前に掃除して燥置べし。

　　　（図２３　蚕　最初取扱の図）

　　最初椹を以て蚕掃落仕方の事

蚕ハ初めより、桑葉をもって養ふものに極れとも、春蚕出る時節、寒国にてハ、未桑の芽出ざる年あり。其時は、拠なく桑の花を取、蚕に喰す所あり。元来椹といふハ、桑の実にて種になるをいふ。蚕の食するハ、桑のあだ

花としるべし。

（図２４　椹とる図）

最初蚕掃落す時、手を能洗ひ、彼桑花の露かく、能燥きたるを、手にて揉、少し細にし、是を能篩し、又箕にてごみを去り、毬壱枚の蚕に椹五六合斗用意すべし。

（図２５椹を手にて揉やハらく図）

扨壱枚の蚕半方も出しと見ヘバ、拵たる椹三合程用意し、生れし蚕多少

　に見合、右の積をもつて用意すべし。最初の篩は、壱歩四方目ぐらひをもちゆべし。篩の図は上巻に記ス、

扨昼九ツ時に、彼包し蚕を取出し、何の器にても、底に早稲のすりぬか

を、能程に見合せふりて、其上に紙を敷、彼拵し椹又ハ切葉にても、器の底にふり置、其うへに生れたる蚕種紙の両端を図のごとくに弐人にて持、紙

のうらより細き箸をもって、しづかにほとほととたゝき、器の中へ蚕をおとすべし。或は、昼時分に壱番出を掃落さバ、其日の夕方に弐番出を掃くべし。前日に生れし蚕を、翌日に持越て掃時は、其蚕何ほと手煉をつくし養ふとも、庭の起より変出るといへり。兎角蚕は、其日切に掃取て、養ふべし。

（図２６　生れし蚕箸にて落とす図　美しう蚕をハかれ霜　七沢）

　又蚕を羽にてはけバ、出かゝりの蚕少し痛むべし。其心得にて種紙に取つきたる蚕も、随し分しづかに羽にて器へ掃入れ、桑を加減能ふりかけ、緩々と八方へ広げ、薄くすべし。此時、種壱枚の蚕、凡三尺四方ぐちひにむらなき様に薄くすべし。器は、何にても数多に取分、蚕と蚕すれ合ぬ様に置べし。初日椹ならば、一日に弐三度程喰せ、桑の切葉ならば、一日に

四五度喰すべし。是も晴雨にて、少しの加減あるべし。夫より、少し暖なる所へ上ヶ置べし。

棚の立所も三ケ所程に立置、冷しき日は、上暖なる所に置、温気強き日は、少し冷し台所に置、雲のかよひを見て加減すべし。桑の葉あらバ、一時も早く葉を喰すべし。桑篩は、蚕に見合せ、後程目のあらきを用ゆ。猶国々にて色々の仕法あり。各其宜しきに随ふべし。

　夫より、一日に弐度ヅヽ先の緇き箸にて、蚕下を切広ぐべし。是獅子前手入れの極秘事にて、蚕の居うらを乾し、かび出来ざるための仕法なり。毎日桑をあたふる前に、箸をもって蚕の厚き所は、薄きかたへ配り置、其後、桑をむらなき様にふりかけ、喰すべし。若雨天続き、蚕下しめり有らば、蚕のうへにあらきすりぬかを少し宛ばらくとふりかけ置て、直に桑を喰すべし。是も蚕下を燥さんがためなり。

蚕出て四五日の間、寒暖〈サムクアタヽカ〉の加減別して大切なり。是より七八日の所手入あしければ、後に色々の病となる。能々大切にすべきなり。又幼飼の時、北風来れば、一向桑を喰ず、又は蚕消死すべし。心得有べし。又暖過るも悪し。兼て八方へ風ぬきの穴を拵置、此時戸の開閉自由にし、時々雲のかよひを見加減すべき事第一也。大方ハ、手入れのおろそかなるよりして、蚕に病出来、性悪くなるべし。夫とはしらず、後に至り、俄に悪しくなりし様にうろたへさハぐ人多し。後の不作は前にありと心得べし。陽気加減は、家々にて違ひ有バ、能々考へ、棚数も多く立置、抜めなく大切に取扱ふべし。

　棚木棚竹とも、生敷は悪し。前方より拵らへ乾し置べし。

桑の若芽をもって蚕掃落す仕方の事

年によりて桑芽出ざるうちに、蚕出る事ある故、拠なく桑の花を喰すといへども、桑の葉有らば、早く葉を喰すべし。桑葉をあたへし蚕は、一段生立はやし。又椹にて久しく養ひし蚕は、少し赤色と成て、性悪く生立もおそし。最初は、葉の筋を取、細に割ミ、壱歩四方目位の篩にてふるひ、前のごとく種壱枚の蚕に桑葉の切粉五六合程用意し、生れたる蚕のうへ

に、能程に見合せ、ふり懸べし。然る時は、生れたる黒き蚕桑葉にとりあがるなり。是を細き箸にてしづかにはさみ取、前のごとく器にすりぬかをふり、其上に紙を敷、是に配り人べし。此時種壱枚の蚕を凡三尺四方位に前のごとく薄く散らし置べし。又紙に取付たる蚕ハ、是も前のごとく裏より箸にて器の中へた瓦き落すべし。器は数多く遣ふべし。蚕は随分薄くす

れ合ぬやうにすべし。

　蚕の善悪ハ、出て五六日幼飼にあるべし。桑を喰するにむら有る歟、又ハ蚕の厚飼歟、家内陽気加減悪しき歟、何にても少手抜け油断有れば、たちまち蚕不揃と成、性悪くなるべし。猶陽気は、陰国陽国にて違ひあり。陰国は少し暖気を催し、陽国は少し冷しくすべし。毎日桑喰す前に、細き箸にて蚕をむらなき様に配り置て、其後桑を喰すべし。雨天の日ハ高き所へ上ケおきて、雨湿を除くべし。

扨蚕出て二日目よりハ、羽わけとて、前のごとく一日に弐三度ツヽ細き箸をもって蚕下を切、蚕の厚き所を薄き所へくばり、むらなき様にして養ふべし。蚕生れて四五日めにハ、鳥の羽を以て蚕下ともに蚕をすくひ取、能燥きたる外の器にすりぬかをふり、其うへに紙を敷、蚕を并べ置、斯のごとくして六七日養ヘバ、蚕少白色にはぜてミゆる也。

〇此時口伝あり。前年の秋早稲のすりぬかを蚕種壱枚に凡五六俵宛に用意し、蚕生るゝ前、彼すりぬかを、からうすにてこまかに砕き、是を粉米篩にてとをし、下へもりたる所を、又すいのうにてとをし、埃を去り中にたまり所を取置。或は明るの昼前に、蚕の居尻取かへんと思ハヾ前日の夜桑喰す前に、彼こまかなるすりぬかを、蚕のうへにばらばらとむらなく能程に薄くふりかけて、直に桑の切粉をふりかけ、加減能喰すべし。斯のごとくする時は、蚕ぬかを嫌ひ、上へぬけ出、桑へ這上るなり。但余り厚くぬかをふれば、蚕ぬかの下にすくミ居て、上へ出ず、加減あり。又其日の朝桑を喰せ、少し間を置、居尻取かゆべし。

　　図の如く器を少し傾け、器のすミより羽にて蚕をまくり取、外なる器へ入替べし。此尻かへの時、是迄器の中に居たりし蚕ハ、今度ハ縁通に置、今迄縁通に居しハ、此度中通に置べし。是は、器の中と縁と纔ながらも寒暖の違ひある故に、蚕を一様に揃んが為、斯のごとく座を入替置なり。尤すりぬか遣ひ加減能すれば、しりがへに早く、奇妙の仕方也。此尻替の時、椹を喰すならば、三度喰せて後、居尻取替てよし。又桑葉ならば、弐度喰跏後、居うら取替てよし。始終獅子の居起より船の起まて、居尻取替る度毎に、すりぬかつかふべし。

（図２７　蚕黒子の時居尻とりかゆる図）

遣ひ加減前のごとし。此の通にして尻替すれば、至極早く蚕跡にも強て残らず妙也。

唯蚕の変ハ、夜四ツ時より、朝五ッ過までの寒さにありと知るべし。此時陽気に随ひ、火も少しハ焼べし。しかし火は、焼加減にて、蚕に薬ともなり、又毒とも成べし。又炭火は宜からず。諺にも春蚕ハ煙で飼へ、夏蚕は風

で飼へといへる事あり。然れども火は、口伝あるものにて、其心得なき人は、必焼べからず。免角陽気は、前にいふごとく、常に我身袷にて能程にすべし。

戸の透ハ、能々紙にて張るべし。透間の風は、陰にして甚寒きものなり。窓の開閉にて加減すべし。蚕出て七八日より十五六日迄、蚕毋は蚕の傍を去らず、手入れの手段、其家の向き、万事気を付べき事専要也。又気の籠らぬ様にすへき事、至て大切也。

　　　　蚕に大小出来ざる心得の事

蚕幼き黒子の時掃落し、種壱枚分三尺四方の積にせず、鍋の尻を見るごとく、真黒に見ゆる程厚くする事、性悪くなる根元なり。譬バ、一切の作物にても、厚く植ればふとらず、実入も悪きが如し。愚成人は、蚕に捨扶持を与る如く、一日に一度漸弐度程桑を与へる故、大方の手入もあしく、桑のふり様抔にもむら有て、疎略なる故、蚕の性あしく成、大小不揃になる也。飼方の口伝を覚、本法をもつて養育せば、中々仕損じ有間敷なり。

　元より蚕ハ情を備たる霊虫にて、尋常の虫とハ違ひ、其席を去らず居て、桑も我前に来れば喰、来らざるとて、彼方此方歩ミ廻り、卑しく育つ虫にあらず。此理を考、随分気を付、桑の宛ひ様等、むらなき様にすべし。其中にハ、心はげしき蚕も有れば、又大様成蚕も有べし。彼厚飼にする時は、達者成蚕弱き蚕の上に登り、桑を喰ふ故、下に敷れし弱き蚕は、桑喰ふ事あたハず。じつとして上に成りし蚕外へ行を待、頭を低て居る。上なる蚕ハ、十分桑を喰ひ、下に敷れしハ得喰ず。上なる蚕漸外へ行

し時に、下なる蚕桑を尋れとも、最早上なる蚕喰盡し、糠と成、残りし葉は皆しほれ、彼是する内時刻過て、弱き蚕は飢に及ぶなり。是不揃性あしくなる根本にて、後々六ケ敷なるべし。至て大切の秘事なり。能々心得べし。

　〇按ずるに、蚕業は人の運によりて吉凶ありといふ事なきにしもあらねども、畢竟は種の善悪と飼方の功拙〈コウシヤツタナキ〉とにあり。又年の廻り気候により豊凶の違ひあれども、是も飼方によりて勝劣〈スグレヲトリ〉有べし。譬バ、耕作の道も同し。豊年は、運よき大も、運あしき大も、共に上作し、又凶年にハ、一統に悪作するといへども、其中に手入次第にて、実入の多少差別あり。然れば、天に少しも隔なく、人力の差ひある事顕然たり。此理をしらざる猥に仏神に祈り、故なき種元を恨ミ、隣の宝をかぞへ、大を妬ミかこち抔する大あり。仏神は、人の願ひによって、加護しましませども、其身飼方に疎かなれば、如何ハせん。幾度も功者の大に尋ね、飼方疎略なくんば、たとひ世間一統凶作の年なりとも、相応の作をすべき事明らけし。

　　　心得違にて年々蚕不作したる事

或国にて養蚕は益ある物としり、其所の地頭より領内の百性に、桑をつくらせ、蚕を飼しむ。然れども、此道不案内なれば、東国より一書を得て、其書に倣ふて養蚕するに、打続き七八年も不作し、莫太の損失有しかバ、国人大きに倦労れて、必定此土地は蚕に遇ざる土地なるべしと、やがて桑の樹をも切払などす。爰に壱人の客ありて、其故を問ふに、郷人の

云、近年地頭より令〈イヒツケ〉せられて蚕飼ふといべども、元より不案内の事なれば、東国より一書を求め、是を見るに、其書に云、むかし関廈

にて、或人蚕の飼方をためし見むと、春の頃種三枚を同旧に出し、壱枚は家の二階温なる所にて飼ひ、壱枚は少し暖なる納戸にて飼ひ、今壱枚ハ座敷の冷し台所にて飼ひ試るに、二階の温なる所にて養ひし蚕ハ、至て見事

に生立、跡の華より五六日早くなり、又納戸にて飼ひし蚕も、程々見事に生立、跡の蚕より三四日早く成、又座敷の冷しき所にて養ひし蚕ハ、甚不揃にて、日数も先の蚕よりハ七八日も後れ、何とやらあしき様に見へしが、彼二階の温なる所にて養育せし蚕は、庭の起より病つき、俄にあしくなり、後は一向不作せり。又納戸にて育し蚕も、不揃となり、是亦すぐれず。彼冷しき座敷にて養ひし蚕ハ、後程段々生気能、見事に揃ひ、天晴上作せり。然ば蚕ハ、冷しきに増たる事ハなし。後世の人必疑ふことなかれと有し故、教のごとく戸を開き冷しくして養育せしに、かひこ黒子の内

に大半消失せ、又残し蚕とも性悪くなり、此事始てより以来、一年も上作する事なく、過分の損失せしなり。所詮、此所は蚕に応ぜぬ土地と覚ゆれば、最早蚕業は相止むべしといふ。客聞ていふ、誠に其範をしらねハ、かゝる誤の出来しも尤なり。其冷しくといふに子細あり。元来関東筋ハ、蚕業を勤る事最久し。故に家居なども種々に構へ、窓の開閉自由にして、風出入専陽気の満る様に造りなすものなり。こゝにおひて、冷しくして飼ふべしと書し物ならん。東国にて冷しきといふハ、袷、単物にても心よしと思へる陽気成べし。

　寒暖の加減は、其家作に有べし。斯とハしらず、冷しくさへすればよしと心得し故、蚕黒子の中に寒さに堪ず死するなり。残りし蚕の性悪く成りしも、此故ならん。都て虫のるいハ、少し温成方好ものにて、暖気なれば諸虫の生気盛んになりて、飛廻る。蚕も是におなじ。

　爰に又一ツの秘事あり。温気を好むとて、むさむさとほめき気の籠るは、至て悪し。只何となく長閑にて心よしと思へる程に、陽気をとる事肝要なり。聖徳太子の教給ふにも、蚕ハ父母の赤子を養ふごとしと有り。元より蚕ハ、異国にも有て、土地の差別にあらずと語りしかバ、郷人是を聞て、其教のごとくなせしに、果して其後は年々上作せしとなり。

（図２８　守国里俗に採桑に採桑〈かいこかふこと〉の秘事を口授す

　　　蚕獅子の居起手入れの事

　　蚕掃立より七八日め頃、桑を喰止ミ、色少し白く、頭ふとく成る。是を獅子の居休といふ。国によりて一ツにつけると云。此時早く居裏を取替てよし。

　　扨明朝五ッ時に、居うら取替んと思はヾ前日の夜桑喰すまへに、前のごとく早稲のすりぬかの細かなる、蚕の上に薄くふり、直に桑の切粉をふり掛べし。然る時は、蚕皆上成桑に這上るなり。二度桑を喰せて、前のごとく居裏取替べし。此時も、前に言器の縁通に居たる蚕は中に置、今迄中通に置しを今度は縁に置、又今まで棚の上に置しハ、下へ廻し、下棚に有しハ上棚に上げ置べし。是も棚の上下にて陽気加減違ふゆへなり。斯のごとく取替くすれバ、蚕一調に能揃ふなり。扨蚕獅子の休と見ヘバ、桑を一日に七八度ふり掛、厳しくあたふべし。是を東国にては責桑といふ。中国にてハふり桑と云。斯のごとくする時、蚕桑の下に眠り居て桑を喰残すとも、是に構ず、

桑を喰切らざる内にハ、責かけくふり掛くべし。此責桑不足なる時は、蚕不揃になるべし。

かくするうちに、先に眠し蚕ハ、上なる皮を脱出る。是を衣をぬぐといふ。すでに衣を脱ぎ、桑のうへに起り上る。是をある国にてハ、うきともいふ。此起りし蚕見へバ、直に桑をふり止べし。此時大方遅き蚕ありとて、此責桑をふり掛れば、先に起上りし蚕桑喰ふ頃、遅き蚕は漸居眠になるを待兼桑を止る故、先に起りし蚕弐三度も責桑を喰ひ、肝心の喰盛の頃、若き蚕の為に食止めに逢ふ故、大きに痛むべし。四度の起俯皆此止め桑の間違ひより。蚕に大小出来、色々の病ひ出る。至て大切の事なり。此時、ある国にてハ、蚕網といふ物をつかふなり。此網の数四ツ程用意して、蚕の大サに見合、後程目あらきを用ゆ。

此網の遣ひ方ハ、蚕過半眠りし頃、蚕の上に網を置き、桑の葉は、網の目

を洩ぬ程に拵へ、あみのうへにふりかけ置べし。斯のごとくすれば、眠りし蚕は下たにすくミ居る。眠ざる若き蚕は、網の目を潜り上なる桑にたかり、桑を喰なり。此時網の四方を持、上にあがりし若き蚕を外の器へとり、責かけ責めかけ桑を喰すべし。下に残りし眠蚕は、少暖なる高き所へ上ケ、起り上る様にすべし。斯のごとくする時は、おそき蚕も早き蚕も、一調に能揃ふべし。是秘伝也。又網なき国は、責桑のとき、前にいふごとく、眠りし蚕早うき上らバ、直に桑をふり止め、何の器にても、その蚕のうへに藁の蘂など四五本見合に置、図の如く、是を標に若き蚕の未　眠を細き箸にて拾ひ取、又眠し蚕ハ高き所へあげ置、己が優に衣を脱ぎ、起上らすべし。能起揃ふを見て桑を喰すべし。又標く拾ふ時は、虫の数多き故、目紛れして拾ひがたし。故に印を付置なり。四度の居起右に同じ。

（図２９　蚕網の図）

（図３０　松ぶたに蘂を置獅子眠の蚕撰分る図

我まゝに這ハて飼るゝ桑蚕かな　　闌更）

兎角一様に揃ふ様に気心拊べし。最初の獅子の居起より此を中国にてハ一ツの居起と云。船の居起迄、右の絅をもって揃る時ハ、庭の眠にハ、悉く能揃ひ、取扱ひに手間人らず、奇妙なるべし。平生随分薄飼にすべし。厚飼に

すれバ、虫少くして繭も小きを作るべし。まゆ小ければ、糸細く糸口よハくして、糸目少し。随分沢山に桑を喰せし蚕ハ、まゆ大ふり忙して、糸正味至て多し。

　　　蚕棚立様并蚕風を嫌ふ事

蚕棚は国々にて色々の仕法あり。其国の勝手宜敷に随ふべし。先藁家なれバ、破風に大成窓をあけ、戸の開閉自由にすべし。所々に風ぬきの穴を明置て、雲のかよひを見、時々戸ざもの加減すべき事第一なり。元より蚕ハ、く

らき。所を好む陰虫なり。戸をあけバ、蚕の居る所は、闇くなる様にして、遠きより風廻り入様にすべし。別して、幼飼ひの時、板の間にして養ふ事、甚悪し。板の湿りかひこに障り、居うらにかびなど出来る事あり。莚様の

物にても敷べし。

　　　家内陽気加減の事

蚕出なば、常に我家の順気を考へ、我身の時服袷又ハ単物にてもよき程にすべし。北風にて冷きと思ハヾ、戸廻りをさすべし。南風にて暖ならバ、三方の戸を開き、大に暑しと思ハヽ四方皆開き、高窓など明て涼しき風をも入るべし。都て諸国蚕出る時節ハ、春八十八夜頃にて、高山にハ、少し雪も残り、又蚕蟄時分は、五月中の前後なり。夏気に差掛りの衣類も一ツは違ふべし。髪の順気を考へ、我家の陽気を能おぼえ、養育すべし。家の内の寒暖を拵るを、陽気を取るといふなり。又余所に戸をさすを見て、手前の戸をさすべからず。余所に戸を明るを見て、手前の戸を開べからず。陽気は家々にて違ふべし。唯手前の陽気を能覚へて、加減する事肝要なり。

（図３１　丹波、丹後、但馬蚕棚の立様薦かゆる図）

（図３２　奥州流蚕だなの図

　　わらだ取かゆるてい気にかゝる花はしまふて蚕飼哉　菖軒）

（図３３　桑をとる図）

　　　鷹の居起手入れの事

蚕稾の居起までにも、二日目毎に居尻取替べし。桑拵へは、庖丁押切の類にて、蚕に見合せ少しあらくきりて、是を五分四方位の篩にてとをし、箕にて木の類埃気を去、能程にしてむらなくふりかけ喰すべし。

雨天にて蚕の居うらに、かびなど出来る事あり。其時ハあらきすりぬかを、蚕のうヘに少し宛ばらばらとふりて後、桑を喰すべし。居うら燥きて、蚕桑を能喰ふなり。此麌の居起きにも、責桑の時起り、蚕うへにうき出ば、前のごとく桑を振止ミ、網を掛蚕を揃ゆべし。網なき国は、前にいふ藁しべなどしるしに置き、若き蚕を箸にて拾ひ取、眠りし蚕は高き所へ上ケ、早く起る様にすべし。又拾ひ取し若き蚕は、桑を厳しく喰せ、早き蚕に追付様にすべし。ねふりし蚕は、起揃ふを待て桑を喰すべし。此時を休め桑といふ也。此休め桑は、山の岡などにある潤ひなき桑ハ悪し。其故は、蚕しバらく食を止りて居たるゆへに、少しかハく気味あるべし。故に、和桑の潤ひあるを撰ミ喰すべし。四度の休め桑皆斯のごとくなるべし。

哥二

鷹休ミ風湿寒をしりぞけて

　　　　かひこはうすく桑にむらなく

　（図３４　桑の葉を刻んでいる図）

　（図３５　但馬、丹波、丹後蚕棚の図

　　　　　蚕飼ふ女や古き身たしなミ　太祇）

　（図３６　桑ははこぶ図）

　　　船の居起手入の事

船の時も前のごとく、二日め毎に居尻取かへ、蚕薄くすべし。桑は蚕

に見合せ、少しあらく拵喰すべし。此時も、寒暖の加減大事なり。手入の油断すべからず、責桑ふり桑前におなじ。

　（図３７　奥州流の図）

哥二

船休ミ風湿よけて桑責よ

暑気に火たくな、はづせ戸障子

（３８図　関東辺　刈桑運ぶ図）

　　寒気を凌し例の事

むかし蚕掃立の頃より廩の居起時分まで、天気不順にて、日毎に風寒く、折々雪あられなどふりて、諸国蚕過半消へ損ぜし事あり。其時ある国に、至極才覚の人有て、兼て八畳づりの紙帳を用意いたし置たり。是をつりて、

中に棚を立、夜ハ家内の人、此中に寝て暖にし、又少しハ炭火など入れ、昼は紙帳をまくりあげて、少ヅヽ風を入れ、ほめかぬ様にし、戸廻り風の出入程よく加減をし、或は家内所々に火を焼、昼夜秘術をつくし育けるに、諸

国の蚕は、弐歩方もなく不作せし故、桑ハ沢山下直にて、糸ハ至て高直なり。此人ハ常に替らぬ上作して、思ひのまゝに利徳を得しとかや。是平生養蚕の道に心を委しにより、かゝる功者の出来しなり。但し、平生ハ炭火悪しといへり。

　（図３９　関東流籠飼の図）

蚕盛の時分霖雨を凌たる例の事

　或年、蚕船の時分より庭の起まで、日毎に大雨降つゞき、殊に冷風はげしく、諸国蚕大きにいたみし事あり。其時或里に養蚕功者の人ありて、家内三所程火を焼き、蚕の有所能程に、陽気を廻らし、千変万化して養ひけるに、雨湿に痛まず、其村壱番の上作せり。後に此手段を聞人、皆感じけるとかや。

　　　同暑気を防ぎし例の事

　あるとし蚕庭前より、殊外暑気つよく、南風にてほめきしかバ、国々蚕大に痛ミし事あり。或所の老人いたってかしこき人なるが、此暑は格別ながきことにもあるまじと、思案をめぐらし、大戸口に唐箕を出し、外より内へ向て風を入れしかバ、此人の蚕は少しも暑にいたまず上作せしとなり。

　又或年、庭起りより暑気はなハだしく、人も身を持かぬる程のことありしかバ、彼唐箕にてを凌し例をおもひ、兼て大団扇七八本拵置しをもって、毎日家内蚕棚の間をあふぎ廻りしかバ、蚕少も痛まず上作したり。此人志よき大にて近郷迄も人を廻し、此仕方を教けるに、何れも上作せしとなり。かやうの事ハ平生心得居べき事也。

　　　（図４０　桑の露おとす図）

　　　（図４１　信州辺　蚕棚の脚に車を仕かけ出し入自由にする図

　　　　人に疎し蚕かひの女賢ならん　暁台）

　　　（図４２　関東辺刈桑運送の図）

　　　庭の居起手入れの事

　蚕庭の眠前にならば、桑を沢山にあたへ、不断蚕桑にはなれぬ様にすべし。此時よりハ桑を喰ふに随ひ、厚くあたへ、喰すべし。最初掃立の時分とはちがひ、陽気もつのるべし。格別暑きと思ハヾ、四方の戸を開け、少し風を入程能加減すべし。併蚕の居る所は、くらくなる様にし、雲のかよひを見て、かけ引すべし。又夕日のさし込ぬ様に気を付べし。

　　暑湿にあたりし蚕は、すきといふ病ひいづるといへり。此節桑よく喰進ミ、追付責桑となり、又休桑と見へば、随分手ぬけなきやうにし、数へん桑を喰すべし。最早眠起も、此庭斗なり。網など掛るにも及ばず。蚕過半起上らば、急ぎ休桑を与ふべし。是よりハ、別して上桑をゑらひ与へべし。能桑を沢山に喰せし蚕は、繭厚く糸正味多し。此時別して厳しく桑をあたへ、後程厚くふり掛べし。

　　　哥ニ

　　庭休ミ雨しつをよけて薄くせよ

　　　　桑をたやさず暑気におどろけ

　又爰に秘事あり。至て大暑ならバ、蚕平生桑の青葉にはなれず、いつもあを葉の上に休ミ居る程に、幾度も振かけ振かけ喰すべし。斯のごとく、人間も身を持かぬる程にほめきつよきとしハ、思ひの外蚕も早く成、まゆもはやく作るなり。此時桑不足すれば。繭も小く、皮薄く、糸正味すくなしと知るべし。庭の起より蚕蟄きまゆつくるまでに、凡桑を弐十度より廿三四度喰ふといへ梨。しかし寒暖〈さむくあたゝか〉の加減、桑の厚薄にて、少しハ遅速あるべし。

　　諸国にて繭を作らす品ある事

扨蚕残らず蟄き水晶のごとく透とをる様になり、繭を作らんと巣隠る所をたづね歩む。是を東国にてハひきると言、中国にてハすがくといふ。扨国々にてまゆつくらす仕様色々あり。先荒増を絵図にしるす。

　奥州路は莚の縁を弐寸程折立て、中に力竹を角違ひに結ひ付、藁三四本宛もつて図のごとく三角に折、是をむしろの中に立ならべ、此中にすがきし蚕をばらばらと配り入れ、少は火も焼き、暖なる所へ上ヶ置て、繭をつくらす。是をゑびらと云。又間伏ともいふ。

（図４３　奥州流　すがきし蚕を撰分るてい）

（図４４　奥州流　蟄し蚕をまぶしに入れ繭をつくらす図）

　丹波丹後但馬辺は、柴薪の枝を図のごとくたばね、是を棚の間にならべ置き、此間に蚕を入、おのれ儘にのぼらせ、まゆ作らす。又薪に蚕登りたるを外へとり、少し暖なる所へ上ケならべ置、繭をつくらすなり。夫より三日めに、身ワけとて、薪を引分風を入、繭の湿り

を乾すなり。

（図４５　丹波、丹後、但馬薪を束る図）

　又江州は図のごとく二階裏より繩を二筋ヅヽつり、此縄にふしなき竹の管を通し、寔の棚を図のごとくつり下ケ置、桑喰すとき、棚の薦を棚木ともに上ケ下ケ自由にする也。又蟄きし時ハ、此棚に簀を敷、図のごとく藁苞に蚕を入れ、是を棚の間へ立ならべ、繭をつくらすなり。

　又関東辺は、幅三尺余長サ壱間程の竹の目籠の中に薄き莚をしき、蚕を飼ふ。又蟄し時も、此籠に繩など張、薪の枝を入れ、是に蚕を人まゆを作らす。

　其外信州北国筋色々の流儀ありて、諸道具様々差別あり。其国々に随て宜きを用ゆべし。又すがきし蚕は桑を喰ざる物故、痛早し。随分手早に取あつかひ、繭作る所へ人べし。又厚くすれば、蟄きし蚕の尿りまゆにか乂り、糸口よハくなる。随分薄く人べし。

（図４６　丹波、丹後、但馬薪やとひの図）

（図４７　江州流つり棚の図　さゝ波や蚕飼涼しき自在棚　鵞少）

　扨まゆハ、五六日。めに残ずはづし取、器に入れ、風に当べし。七八日過ば、日南に干つけ、中の蛹をいため、出ざる様にすべし。又雨天ならバ、早く炭火をおこし、焙炉に入、中の蛹をいため出ざる様にすべし。

　扨最初蚕の掃立より干辛万苦して、漸繭作る頃に至り、誤て手大の麁忽出来なば、今迄の勤忽水の泡と消へ、莫太の損失成べし。

能々心得べきなり。

（図４８　江州流藁苞に蚕を入まゆを作らす図）

（図４９　奥州流まぶしの繭をはずす図）

　つれづれ艸に云。高名の木のぼりといふもの、人の高き木にのぼりて、やがておりんとするを見て、今纔になりし時、危うきぞ過すな過すなといふに、かたへの大訝りて、さしも高き所に上り居る程は何ともいはで、纔になりでかくいふは、心得ぬ事かなといふ。彼高名のいふ、されば高き所に居たらん程ハ、めくるめき、足ワなゝき、己も誠に危しと思へば、我いふ迄もなし。繼になりて、心ゆるみし時にこそ過ちハ有なれといひしとぞ。此事兼好が筆ずさみに載て、人の能しれる事なれど、理の近く聞へて、しかも諸道にワたりて意味深ければ、爰に書印侍る也。大方の事、心の油断より過ち出来るなり。蚕業も初めの程ハ、昼夜大切に養育し、最早仕課たりと、油断より思ひの外過有べければ、能々慎べし。

　　　糸取様口伝の事

　蚕既に繭と成、五六日目よりは糸を取べし。是も国々にて流義多し。先中国は、六寸四方位の木の籆に図のごとく巻付るなり。又是を壱尺

七八寸四方の繅車にうつしかへて、干立るなり。

　奥州辺は、糸取女の左の方へ、図のごとく竈をぬり、鍋のゆ煮たぎる時、まゆ壱升を四五度程に鍋へ入れ、加減よく煮たる時、箸をも゛

つてかきまぜ、糸口をことぐく取、半分斗傍に置、能き程もち、是に口伝あり。鍋の縁に馬の尾、或ハ女の髪の毛を小き輪にし、是を結ひ付、此穴に糸を通し、図のごとく竹の籰に巻付る。尤わくは、女の真向に横になし、図のごとく右の手にて手前のかたへうち廻す。糸口緇くなる度毎に少し宛取添て、むらなき様に巻付るなり。又まゆは余りにえ過れハ、糸くちよハし。又奕ざれ（糸口出ず、是に加減あるべし。

（図５０　丹波、丹後、但馬繭を簀にならべかハかす図）

（図５１　丹波、丹後、但馬糸とる図）

（図５２　奥州流糸とる図）゛

　又一方に笆の右の方へ車ニツ仕かけ、是につよき糸をかけて、早くまき付る法あり。図にあらハす糸取仕法流義多し。宜しきをもちゆべし。

　又糸をあげる繅車、これも国所によりて色々仕法ありといへども、まづ一方を図に顕ハす。又いとをすがぬる仕様、猶更国々の変りあれば、

其所にしたがひ、宜しきをもちゆべし。依て、今一方をあげて図にあらハす。余は繁ければ爰に略す。

（図５３　奥州流車を仕かけ糸をとる図）

（図５４　繅車にて糸繰る図　松になき風薫る也おほか陰　鵞少）

（図５５　糸すがぬる図）

蚕の善悪并病見様の事

　蚕掃立より七八日めに、獅子のふり桑に成を上と知るべし。同六日め位に、獅子の責桑に成を中とす。同四日め位に、獅子の責桑になる

を下としるべし。

　獅子休の中に白き節あって水出る蚕有バ、庭の居起にあしく成べし。是は冷たる蚕、又は暖過たる蚕にあるべし。獅子の居尻とる跡に、

死たる蚕あらバ、是は障子の透間より湿風にあたり、又は毒に当りし蚕としるべし。鷹の居起、船の眠起に、頭細き蚕多出来、桑喰切悪くは、厚飼歟又は種もと悪きとしるべし。又船の時分ちゞけたる蚕多くあらば、暑気に当しと知るべし。又居しらずといふ蚕あり。是も所によりて色々の異名あり。是は寒暖〈サムクアタヽカ〉の手入悪しく、先は冷湿にあたりし蚕に多く出来る也。又居尻にかび出来たる蚕に、多くありと

知るべし。又蚕器のへりに多く登ることあり。是は厚飼にて少しいたミ、病気の下地あるに、風雨暑湿に当し蚕なりと云り。又は蚕の乱性

と云。

　又雷雨しきりにふり来らば、急ぎ戸をさすべし。蚕のために大毒にて、是より色々の病と成、又庭前に蚕の頭俄に赤色になり、桑喰ふ事進

ざるは、幼飼の時に暖過し蚕、又ハ焼火の火気に当しとしるべし。又蚕起り上る時、衣をぬぎ得ざる蚕あり。是は、桑の拵麁末なる歟、或は木の類にてもまじりありて、蚕の背に当し疵より病出しと知べし。新宅にて飼ふ

は、順気能き年は構ひにならず、不順なるとしは飼損じ多し。是ハ生壁の漲に当しとしるべし。湿除に少々火を焼も宜し。

　此外蚕の病ひ多しといへども、皆幼飼より手入あしき歟、又は種元の悪きによるべし。故に種元を吟味し、随分能き種を求め、飼方手抜のなき様にすべき事第一也。後の患は前にあり。心得べし。

養蚕秘録中巻　終

　養蚕秘録　下巻

　　　　目　　録

　　真綿仕立様の事

　　糸綿疎かにすべからざる事

　　秋胡子が妻の事

　　小嶋村の老女雲気を見る事

　　蚕種本場の事附り焼飯を金百両に売し

　　養蚕詩二首　同解

　　斉宿瘤が事

　　董永が事

　　蔡順が事

琢県に桑の名木出来し事

衣服始りの事

日本木綿の始りの事

漢張湛蚕業を勧むる事

蚕詩三首　同解

蚕の徳にて福者となりし事

　　　真綿仕立様の事

真綿は糸に取がたき悪しき繭を撰出し、上灰汁にて能煮、夫より水に漬さらして灰汁を出し、図のごとく、ゆびにて引延し、引盤に掛るなり。国々流儀多し。それより清水にて引延し、干立る所あり。又綿にて水に潰さらす所

もあり。夫よりして、むしろ或ハ繩につりて、ほしたつるなり。

（図５６　雄略天皇の御宇の駿河国よりはじめて

真綿を献ず

駿河なるふじの桑蚕の新綿はたかねのゆきの色にますらん　為家）

人皇三十二代欽明天皇の皇女各谷姫、常陸国筑波山に飛び去り給ひ、蚕神と斎れ給ふ。国人等養蚕大明神と崇め奉る。筑波山乾道仙人住して、真綿を練る秘事を民に教し由、古書に出たり。又一説に中華舜の御代に官人馬

を引出て、庭上にはなし置ぬ’。折ふし皇女玉簾を挑げ、馬を見給ふ。彼馬皇女を深く見入てやミぬ。或夜の夢に彼馬告ていふ様、ワれ畜類ながら、姫の艶色に引かれて思ひ人ことせつなり。然れども、人間ならざれハカ及バす、死して一方の蚕と生じ、真綿にひかれて皇女の御身に添ふべしと告て、夢覚ぬ。翌日彼馬果して死す。故に野外に埋しかハ、其地に虫多く生じ、辺りの桑の葉を喰ひ、まゆ作る。是を真綿にひかせける恚古書に見へたり。

又もろこしに馬を飼ふ人あり。女子壱人持り。或時父遠く行て、久しく家に帰らず。女父の帰を待詫て、馬に向ひ戯に云。汝父を迎へ乗せ来バ、汝と夫婦に成べしといふ。彼馬即駈出、父を乗帰る。娘おどろき、此よしを父

にかたる。父怒て馬を殺し、其皮を剥ぎて、木の枝に掛置しに、娘其木の下を通し時、彼皮忽娘をまとひ、倶に化して蚕と成けるとかや。

按ずるに、是等ハ妄説にして信用しがたし。尤世に蚕の種類数多あれバ、一方の蚕にても有べき歟。乍然、生皮を其儘置時は、虫わくこと馬の皮に限るべからず。唐土の蚕ハ伏犠氏より始りて、黄帝の代より広くなる事、諸

書に見へたり。考ふべし。

三才図会云。蚕の神を天駟と名づく。天駟は諸星の司たるゆへに、蚕神ともいふべきや。又天馴は馬を司どる星とも云。又一説に、蚕は龍の精たり、馬と気を同じうす。故に午の日を用ゆともいへり。

（図５７　真綿をかける図）

（図５８　清水にて真綿をさらす図）

（図５９　真綿干立る図）

　　糸綿疎かにすべからざる事

旧事本記日。麻は布となして下民の膚をし、蚕は絹となって上ミ公卿諸侯の御肌を修め、朝衣の服と成、上下の節を分つ。聖徳太子日。神蚕四度の眠起は、天にあるときは元亨利貞、人に有てハ、仁義礼智、身にとりてハ地水火風、仏に於てハ常楽我浄の理にして、生住異滅の理をしらせ、三世を表す名虫にて、種は過去、蚕ハ現在、繭は未来なり。過去の悪き蚕は、現在も必悪し。過去の能き蚕は、現在にて養育正しく、繭も必よし。夫々に随て報因の果を受る。

蚕繭と成て炉に掛る時は火炳に焦れ、糸になるハ熱湯に煮らる。凡絹五丈余を以衣服壱ツとし、是にまゆの数凡三千余にして虫の数も亦三千余なり。又農家の辛労をも思ひ、絅壱寸糸壱尺をも疎かにおもふべからず。

昨日-到城-郭帰-来涙満巾遍-身綺-羅-者非是養蚕人と古人の謂りしもさもありぬべし。又養蚕を殺生の業と心得ぬる人も有ぬべし。然れども、無益の慰にするにはあらず。衣食の道は安民第一の業なれば、一日もなくんばあるべからず。故に天の神の教を垂させ給ふ大業なり。

鳥獣虫魚草木までも、天地神明の恵ミによりて生出る所の恩頼なれば、仮にも疎かにすべからず。かゝる理をもしらず、唯利欲にのミ耽りて、人を恵むの心なくんば、天の神の御心に逆ひ、災害目前に到ぬべし。能々慎ミ正

直にして業をつとめバ、祈らずとても、神や守らんとの御誓豈むなしからんや。心あらん入は此理を弁へ、猥に妖僧の言を信じて惑ふことなかれ。

　　　秋胡于が妻の事

もろこし秋胡子が妻潔婦といふは、嫁して五日めに、夫官につかへて他国へ行けり。五年過て秋胡子古郷へ帰りけるに、五月の頃道の辺に美しき女桑を採り居たりしを見て、ふと心まよひ、女に戯れいふハ、我は旅の者なるが、行さき未だ遠く侍れバ、桑の木陰に休らひ度、一樹の陰の宿も、仮初ならぬ理りをいかゞ思ひ給ふやといひけれども、女見向きもやらず、桑を取て居たりける。

（図６０　秋胡子が妻桑を採る図）

秋胡子いとゞせきあへぬ風情にて、御身かく勤給ふも、世のいとなみ、身を助んためならずや。身を立んと思ひ給ハヾ、我に随ひ給へかし。我は官につかへて、俸録身に余り、金銀多く貯へ、今古郷へ帰り侍る也。我にした

がひ妻とも成給ハヽ、飼蚕桑謫のいとなミもなく、安かりなんといへば、女答へていふ様、我は人の妻となりし身なれば、桑とりいとなみハ定れる業也。故もなく金銀を得ん事道ならず。其上我夫も官につかえて、他国に行たまふ。朝な夕なの願ひにも、夫無事にて勤め給ひかし。我今程は貧しく侍れバ、桑をつミ蚕を養ひ、姑につかへまいらせ、猥なる心なく、夫の帰を待んとこそ存つれと、潔よくいひはなちければ、秋胡子もせんかたなく立別れ、

我家へ帰りぬ。

扨貯へ帰りし金銀を母の前に出し、妻にも悦せんと尋ぬるに、やがて外より帰り来ぬ。能々見れば、道の辺りにて桑を謫居たる女なり。

秋胡子はっと赤面し、暫く物をも云ざりしか、妻秋胡子に向つて、御身我を迎へ給ひて五日めに旅だち行て、五歳が間親の養ひを顧ず、官につかへて貯へたる金を、道の辺の女にあたへんとし給ふハ何事ぞや。色にふけりて親をわする不孝不義の人なり。かゝる浅はかなる人とハしらず、五年の間、貧苦をしのぎ、節義を守しも詮なく侍れバ、我にハいとまを給べしと、終に家を出行、其夜深き淵に身をしづめ、空しく成ぬ。秋胡子驚き、悔歎くといへどもかひなし。世にはかゝる潔き女もありけるよと、闖人皆涙を流し感じけるとぞ。

小嶋村の老女雲気を見る事

寛文年中の頃、但馬国城崎郡小嶋村といふ所に、八十有余の老女あり。此甘の雲気を見て風雨を考るに、頗妙を得たり。よつて、近郷の百性或は漁師船乗など日夜来て晴雨を問ふに、一ツとして違ふ事なし。近郷の人、彼を呼

で奇母とぞ号ける。又其近辺蚕業の家多し。因て蚕の吉凶を問ふに、奇母のいふ、今年五月初は天気、後雨天なり、爰をもって考ふれバ、早き蚕は利あり、遅き蚕ハ利有まじといふ。果して其言に差ず。

或時大坂堂嶋の者、城崎温泉に入湯し、此奇母の事を聞。誠や中華宋といふ国に、不亀手の薬を伝へて、綿を洗ふ事を業とする者あり。不亀手とハ冬手のこゞへぬを云。呉人此薬方を百金に買て、冬越人と水戦し、越の大軍を破りし例あり。我ハ此老婆をつれ帰り、毎日天気を見させて米相場をせバ、大利を得ん事目前也と、独咲して、彼村に行、老婆を抱へ、早駕籠にて大坂へ連帰り、別宅に置、深く秘して人に語らず、日々夜々晴雨を問て相場をしけるに、如何なる故にや、老婆の言一ツもあハず、案に違ふて大きに損し、老婆を責て、其方日和を見る事妙を得たりと聞、数多の金を費し、連帰り、育ミ置に何が不足にて莫太の損をさせしやといヘバ、老婆のいふ様、全不足の有て虚言を申すにてハなけれども、当国にハ、但馬国津居山の如き海辺に近き高山なし、夫故様々に心がけ見れども、とかく見へがたく侍るなりと答ければ、せんかたなくてやミけるとぞ。

（図６１　老婆を連れ来たる図）

按ずるに、事は馴て知るの理あり。此老女数年の間、朝夕津居山の嶺に雲のかゝるを見馴て、天性自然に覚しならん。養蚕の業もこれにおなじ。一通定りたる法を覚へて後は、日夜我家の陽気をおぼゆること大事なり。陽気ハ

家々によりて異なるべし。これを考ふるに一理あり。かならず半途にてすつる事なかれ。

蚕種本場の事附り焼飯を金百両に売たる事

元文年中の頃、関東の国々ハ、信州上汨辺の蚕種を求て上品とし、帝都の近国は、江州并播州加古川より出る黄繭種をもって蚕業をなす。又其比下総国結城辺より蚕種多く出し、奥州其余の国々へも売出す。

或時結城辺大洪水にて、川下の幅狭き所にて上なる山崩れ落、川上三里余の間一面海のごとく、民屋田畑大きに損じ、死する者夥し。因玆其所の種商人、其年蚕豼を取ぢ事あたハず。故に、奥州伊達郡伊達村に行て、右大変

の事を語りけるに、亭主いふハ、当地の桑は結城辺よりも勝れ侯得者、当所にて種をとり給ハヽ、天晴上種出来すべしといふ。夫より居村近郷の繭を択求て種を取りける。

又亭主いふ様、信州は国に善光寺如来ましましける故、国人等此結縁にあづかるとて、種紙の内書を中如来と書しとかや。幸ひ当地に、霊験あらだなる如来の在ます御堂あり。当国は、如来堂と書て然るべしといふにぞ。尤と同じける。是奥州種紙内書の姶なり。夫より今ハ色々其家々の印を書入るなり。右の種諸国に売て試るに、翌年蚕天晴上作せり。是より奥州本場種ともてはやし、今は伊達、信夫の両郡其外近郷にても種を取て出すなり。

又其後、奥州会津辺大洪水にていかりの沼切れ、先年破損せし総州結綿の川筋に水漲り出、此時又大きに切れて、其川筋心騒聊いハんかたなし。

然るに、其川下を旅人二人通りかゝり、此騒動は何事やらんとためらふ中、川上より水逆巻、大蛇の起り出るが如く漲り来る。あハやと見るに、一面海のごとくになれバ、如何ともすべき方なく、二人は柳の木に攀り、仏神に祈誓して、夢の心地にてぞ居たりける。追々風雨しきりにつよく、中々止むべき気色もなく、二人は枝にすがりつき、今や木と倶に押流され、底のみくずとなりもやせんと茫然とし、二日斗も居たりしに、漸風雨も小止ミ、少しいきある心地なれど未満水引されバ、為方なく仏神の御号を唱へなどして、水の引をぞ待居たる時に、壱人の者は懐中より焼飯ニツ取出し、是を戴き、壱ツ喰ひて残壱ツは懐中しぬ。又壱人の旅人ハ何の貯へもなく、彼喰残せし焼飯を所望しければ、彼ものゝいふ。我も壱ツにてハ喰足らねどもい此満水いつ引べきとも覚へず、まさかの時今一ツ喰んと思ひ残せし也、此義はゆるし給へといふ。

彼壱人ハ段々空腹になり、身体つかれければ、今ハ左右のせんかたなく、扨々御身は情薄き人かな、かくまで我は飢につかれし上ハ、忽今水中に落、みくずとも成べし。何を隠し申さん、我金子弐百両懐中せり。此金百両進じ申すべし。其焼飯我に与へ給へといふ。彼もの気毒にハ思へども、今此時宜に及て、金銀にて命は買れまじ、我金子の望なしといヘハ、成程貴殿の言尤なり。去ながら、御身ハ最前一ツ喰給ヘバ、今しバらくハ凌がるべし。我はすでに精力も盡たり。何とぞ助け給へとてくだんの金子取出し、只向たのミければ、彼もの思ふ様、迚も助かるまじき命ならば、此飯壱ツ喰ひたりとも、幾日の餓をか忍ん。所詮此飯彼に与へずして死せば、恨ミん事も不便なりと、終に金子とかへにける。彼もの大きに悦び、斯同じ木に登り助けを得るもさせる因縁にやあらん。今は死ども恨なし。神仏の加護にて二人が命助りなば、行末長く懇意にせばやと悦びける。かくて漸四五日めに水も引しかバ、二人とも不思議の命助り帰りける。

（図６２　洪水の図

古き人の物がたりに、霖雨の節、山谷又ハ沖など、地震のごとく鳴事あれば、大変のきざし也。ゆだんすべからざるよし語つたへ侍りき。先年紀州熊野にてさる事ありて、後世のための事の次第を石に彫て建しとぞ。）

爰をもって、食の大切なることを常々かんがへ知るべ七。乱国の時にハ、茶漬壱ぱい何程の価を出しても売者有まじ。強驕のものは恣に民家におし入り、金銀財宝を奪ひ、衣服をはぎ取など、恐しきこといふ斗なし。然れば、今太平の国恩を思ひ、如何なる麁食をもおろそかに思ふべからず。

或人の句に

業平も飯喰ふてからかきつばた

鶯-歌燕-舞　画-梁東

　　桑-柘含雲動女-工

　　撫景皃成花笑日

踏青歩学柳揺‘風

　　繰盆糸献今-朝白

　　視簿燈挑昨-夜紅

不独一-家胡-老暖

　　我-来還擬貢王-公‘

（図６３　鶯哥燕舞の図）

此詩の意は、鶯歌燕舞とて、鶯ハ歌ひ、燕は舞戯るごとく、春の気色長閑成様を述だり。画梁とハ、彩色などしたる梁にて、美麗なる宮毆なとの気色をいふ。其東の林苑などの事也。桑拓含雲とハ、桑の若芽青々と茂りたるを、雲のごとく見立いふ。又地気のぼつて雲となれば、春暖の気を含むをもいへる歟。動女工とハ、桑も芽を出せば、養蚕を催す也。撫景とハ、春景色を愛するをいふ。兄成花笑日と（花のほころびたるハ、笑様にミゆる也。踏青歩学柳揺風といふハ、春野の青々としたる所を歩む姿ハ、柳の風に揺に似たりと也。此四句ハ春の長閑なるに、桑とる女の麗しき粧ひを述たり。繅盆糸献今朝白とハ、既に蚕の功も終り、今朝ハ白き糸となり、宗廟に献ずる様になりし也。視簿燈挑昨夜紅とハ、簿といふ蚕の道

具也。昨夜の紅とハ、又前に立かへり、夜もすがら燈を挑げ、蚕を養ひし事をいふ。不独一家胡老暖我来還擬貢王公とハ、独手前の老人のため斗にあらず、貢のためにすると也。

　小-麦青々大-麦黄

原-頭-日-出天-色涼

　姑-婦相-呼有忙-事

　　　舎-後煮繭門-前香

繰-車嚶嘈-々似風-雨

繭-厚糸-長無断縷

　　　今-年那暇織絹着

　　　明-日西-門売糸去

（図６４　近隣の女達が忙しさを話す図）

此詩の意ハ、小麦青々大麦黄と、先時節の景をいへり。小麦ハいまだ青々として、大麦は已に赤らミたり。原頭日出天色涼とハ、原のほとりより朝日さし出、空のけしきも、涼やかに晴ワたり、時節の景見るべし。姑婦相呼

有忙事と、是より民家の体をいへり。麦秋の頃になれバ、最早蚕も繭を作る。姑ハしうとめ、婦ハよめといふ字なれども、こゝにて（只農家の女、老若の事と見るべし。向ひ隣のもの、互に時節の忙しき話をする体なり。舍後煮繭門前香、繰車嘈々似風雨とハ、舎の後にて、まゆを煮れば、門前までも匂ひ、糸を繰車の音ハ嘈々とひゞきて、雨風に似たり。繭厚く、糸長無断縷とハ、天晴上作のまゆなるべし。今年那暇織絹着、明日西門売糸去とハ、農家のものハ、かく苦労をして糸をとれとも、ことしも那のいとまありて

か、自身絹を織て着る事をせんや。明日は西門の市に持行て、ことぐごとく売去らん。扨々産業の忙しき事かなと、互にはなしあふ体也。田家の体を能述たる詩なり。

　　　斉の宿瘤が事

もろこし斉国に閔王といふ賢王おハしけり。ある時国中をめぐり給ふに、東郭といふ所の民百姓大勢連だち、桑を採りて居たりしに、閔王の行幸を見て、皆街の側に出て、閔王を拝す。其中に宿瘤といふ女壱人、見向きもせ

ず桑をとり居けるを、閔王あやしミ見給ひ、朕今此所を通るに、国中の民朕が行粧を望ミ、拝せずといふものなし。彼は如何なるものぞと問しめ給ふ。官人行向つて、しかしかの様を尋けるに、宿瘤答けるハ、我父母の命によ

りて桑をとる。未大王を拝せよとの命を承らず。此故に、大王を拝し奉らすといひて、猶脇目もふらず桑を採り居たりける。

（図６５　斉閔王召宿瘤図）

此よしかくと申上ければ、閔王聞給ひて、則彼女を御前に召されけるに、右の顋に大なる瘤あり。閔王見給ひて、汝が面に其瘤ある事、年若き身に嘸恥かしく思ふべしと仰られければ、宿瘤答申様、我父母より受し身体髪膚少しも疵付ず、我瘤は生れつきなれは、那これを恥とせん。心の穢こそ恥しくおもふべけれと答けれは、閔王深感じ給ひ、賢女なりとて、後車に会し、つれ帰らんとの給ふ。

時に宿瘤申様、我父母家にいます。父誨の命をもうけずして君に随ひ侍らハ、是奔女なり、大王如何ぞ用ひ給ハんといふ尸閔王大きに慙たまひ、終に使者をして黄金百鎰、二十四両を鎰といふ。を贈り、礼を厚して迎しめ、後宮に人て妃の位に備へ給ひしかとかや。

　　　董永が事

董永ハ、いとけなき時毋におくれ、父につかへて至孝なり。もとより家貧しければ、人にやとハれ耕作し、父を育くミける。父死せる時、葬式をすべきちからなけれバ、我身を売て葬礼をいとなみ、其後身を売し主人の許へ行道にて、美女にあへり。

彼女董永が妻にならんといふ。董永がいふ、我貧しくて、頃日父におくれ、葬をすべきちからさへなくて、我身を売、父の孝養に充つ。今主人の家へ行也。如何して夫婦にならんといふ。女のいふ様、我能機をることをす。倶に主人の許に行て仕んといふ。董永辞することあたハず、終に夫婦と成、倶に主人の方へいたり仕へけゐに、彼女一月の中に、かとりの絹とて、

たくひなく美しき絹百匹織て主人の前にいだし、董永が債をあがなひければ、主人大きに驚き且よろこびて、董永夫婦にいとまをつかハしぬ。董永ハハ旧里に帰らんとして門を出ける時、婦人告ていふ。我まことハ天の織女なり、汝が孝行深を感じ、天より我をつかハして、汝をたすけしむといひ、早て忽天にあがり給ふ。孝ハ百行の本にて有難きためし也。

（図６６　董永が妻衣を織る図）

　　　　蔡順の祟

蔡順は汝南の人なり。母に事て孝行ふかし。其頃天下大ひに乱れ、赤眉の賊とて四方に横行し、恣まゝに財産を奪ひ、万民をなやましけるにより、国中飢饉に及びける。蔡順ハ日々山野に出て、菓を拾ひ糧とし、患難の中に日を送りけるに、其篤行いハんかたなし。ある時、桑の実を拾ひ撰分居たりしに、賊党来り、汝其実は何のために撰分るやと尋ければ、蔡順答へて、今国家乱れ飢饉におよぶ。某老たる毋をもてり。熟たる実ハ母に進め、熟せざる

ハ我糧にし侍る也と答ければ、賊首大きに感じ、米壱俵、牛の足壱ツをあたへ、帰りけるとぞ。

蔡順が徳行はいふも更なり。かゝる悪党の者も其誠行を感じ、惻隠の心を生ず。寔哉、性は善なりとハ此をいふ歟。併ながら、蔡順が徳儀に化せるなるべし。

（図６７　蔡順桑子を拾ふ図）

　　　中華涿県に桑の名木出来し事

中華琢県といふ所に英雄あり。漢中山清王劉勝の後胤、景帝の玄孫にて、姓ハ劉、名は備、字ハ玄徳といへり。幼なうして父にはなれ、家甚まづしく、毋につかへて孝あり。人と交るに礼譲を厚うす。常ハむしろを織、あ

るひは履をつくりて産業とし、好んで英雄に交る。此家の傍に桑樹あり。

（図６８　季定桑樹を相する図）

年々枝葉繁茂して、形車蓋のごとし、人みなこれを奇なりとす。季定といふもの、此桑の木を見て云。桑ハ四木の一なり。此樹かく栄ゆるは、此家より

かならず天下をしるべき貴人出べき瑞相なり、といひしが、果して後玄徳桃林に於て、関羽張飛と同じく義を結び、黄巾の賊を滅し、順々得て軍帥とし、天下を三分にし、呉、魏、蜀相ならんで威名を揮事ハ、くハしく三国志

に見へたればこゝに略す。

もろこし趙の邯鄲といふ所に、羅敷といふ美女あり。花のかんばせ霞のまゆずミ、嬋娟たるよそほひ、ならぶかたなし。ある時川のほとりにて、桑をとり居けるに、往来の人羅敷が美色に見とれ、恍惚として神を飛し、街に躊

躇しける。折ふし趙王狩に出給ひしに、車の内より羅敷を見給ひ、宮中に人て妃に’備んと召されけれども、かたく辞して節義を守りけるとなり。

　羅-敷善採桑

　採桑城-南-隅

　青-糸為-籠-縄‘

桂-枝為二籠-鉤

（図６９　趙王、狩猟の途中に羅敷を見給う図）

　　　衣服始りの事

上古糸綿なき以前ハ、衣服といふものなく、或は木の葉の類を、葛をもってつゞり、身に纏ひ、家居迚もなく、穴を堀て住しけるに、恙といふ虫来て人を刺す。是を恐れて穴の口を閉て深隠る。今の世に無事を祝して恙なくといひ、秘すべき事を穴賢といふも、此謂れなりとかや。

天照神の御代にいたり、稚日女尊機物を司り給ふ。猶委しく上巻に記ス。人の代となりてハ、応神天皇の御宇に、百済国より絹縫姫真毛津といふ者日

本に渡る。又其後呉国より呉服綾織の女工をおくる。これより本朝織物の道大に広れり。今摂州池田にいはひ祭りて、呉服祠と号して顕然たり。又元明天皇和銅年中に勅して、綾錦を織しめ給ふ。其後洛陽西の市にて絹帛多くをり出す。今もなを西陣織とて、京師第一の名産なり。

もろこしの機は黄帝の代より始り、繍の事は文王の后はじめたまふとなり。或書ニ漢の張騫といふも、槎木にのりて天の河の水源に到しに、神女機を織居たる所に、牛を牽来る男ありて、相かたらふ。是牽牛織女なりとい

へり。これより漢帝乞巧奠をはじむといへり。

又本朝にては、人皇四十六代孝謙天皇の御宇、天平勝宝七年に始て此祭を行ハせ給ふよし、もつはら婦女の業を成就せん事を祈るといへり。

（図７０　呉服、漢織という二人の織女が宮中で機を織っている図）

（図７１　高機之図

くりかへし春のいとゆふいく世へておなしみとりの空にみゆらん　定家）

　日本木綿始りの事

本朝上古は、絹布ありて木綿なし。卑賤の者は布に芦の穂、或は萓の穂など人て、寒気を防ぎしとかや。人皇五十代桓武天皇の御宇に、崑崙国の人参河国に漂着す。此人木綿の種をもちたりしを請て、諸国に植さしめ給ふ。

いつしか此種を失ひしに、又文禄年中に異国より種をつたへ、今天下にあまねく弘り、人民の助となる。今木綿と呼ぶものハ、此綿にて織る布なり。しかれば、木綿布といふべき略語なる歟。文字音にていふ時は、同じ木綿にして紛ハしければ、絮の時は和訓して木綿といふ。又唐弓にて打やハらぐゆへ、唐綿とも打綿ともいふ。又木綿の服を布子といふも、

古代の名を失バざるものなり。又衣服を染る事ハ、和漢ともに其初久しき事とぞ。むかし奥州信夫の里に、玉出峯実といふ人、石の面にしのぶ草のミだれたる紋ありしを、狩衣に摺つけもちひしとなり。

古今

みちのくのしのふもちすり誰ゆへに

　　　ミたれそめにし我ならなくに

　　　　　　　　　　　　　　　　　河原左大臣

又播州しかまより染出す布をかちん染といふ。

詞花

　　はりまなるしかまにそめるあなかちに

　　　　　人を恋しと思ひけるかな

　　　　漢張湛民に蚕業を勧むる事

　後漢の張湛饂二し人は、生質礼を好ミ、つゝしミふかく、勦止にも法度を正しくし、能諌をなして、君につかへ、萬民に勝る才あり。漁陽郡の太守たるとき、専農業を勧め、又採桑の事をなさしめ、能民を撫育しければ、｀民その化に浴し、国豊に楽めり。よつて歌を作る。。

　　　桑無附枝麦秀両岐張君為政楽不可支

　桑にふしなしとハ、やどり木もなしとなり。両岐とハ、二また麦ハ秀て、ニツの穂を出すと也。皆豊作の事をいふ。張君政をなし給ふゆへ、国平にして、民の楽はかるべからずとなり。

　養口資身頼以桑

　終成王道沢流長

　吐糸不羨蜘-蛛誅巧

　飼葉頻催織-女忙

　三-起三-眠時化-運

　一-生一-死命天-常

　待-看献繭盆-繅繰後

　先与吾皇織袞-裳

　　　　　　　　　　　　　　　　　謝畳山

（図７２　農村蚕養うの図）

此詩は蚕の功を賞せし詩なり。養口資身頼以桑とハ、蚕は諸虫と違ひ色々の物を喰ず、桑一種をもって足れりとす。終成王道沢流長とハ、衣食は生養の急務、沢流ハ王化なり。蚕は衣服の根本なれば、終に王道を成すといへり。吐糸不羨蜘蛛巧とハ、蜘蛛〈くも〉睦樹上に糸を張てド自ら食を貪る。

其事ハ巧也といへども、其志ふ人のふるまひなれぷ羨にたらずといへり。飼葉頻催〈もよほす〉織女忙〈いそがし〉とハ、蚕の糸を吐は蜘蛛におなじと

いへども、我食を貪るためにあらず。其功を他に施し、其余慶によりてやしな（る。是君子の禄なり。頻催織女忙ハ其功を他に及すをいふ。三起三眠時化運一生一死命天常とハ、動止ミな天命に帰す。待看献繭盆繅後先与吾皇織袞裳といふは、蜘蛛の巧を羨ずといひし句に対して、首尾を結ぶ。盆樔

は（广に効）廟に献ずる祭器糸を繰る具なり。袞裳は天子の服なり。是蚕の成功を述て君子の徳ある事を賞せり。

　粉-色全無飢-食加

単知人-世有栄-華

　　年-々道我蚕辛-苦

　　底-事渾-身着紵-麻

此詩は農家の労を憐て作れる詩なり。粉色ハ女の粧ひをいふ。全飢食

の加ふるなしといふハ、農家の女をミれば、紅白粉の粧ひはなくして、まつたく飢っかれたる容に似たり豈知人世有栄華といふは、かやうの身ぶん

の者は、何として世間の栄華あることをしらんとなり。遠国辺境の農民などハ、都て繁華の土地の人に交らねバ、世間の栄華はしらじとなり。年々道我蚕辛苦、底事渾身着紵麻とハ、農民みづから歎じていふ体なり。年々蚕を飼毎に、我は夜もゆたかに寝やらず。辛苦して糸をとりながら、かへつて我身にハ紵麻とて麻の布を身にまとひて、生涯栄華の楽をもなさず、あらき働きに日を送ることよと此詩は、表には辛苦を歎ずる情を述て、裏には天命に処する意をふくめたり。

　　昔-年愛笑蚕-家婦

　　今-日辛-勤自養-蚕

　、仍-道不愁羅與綺

　　女-郎初-解織-桑-籃

此詩は蚕業の全体をいふ。昔年愛笑蚕家婦といふは、蚕家の少婦〈ワかきをんな〉平日無為の時をいふ。昔年ハむかしの事なれども、年久しき以前

の事にハあらざるべし。只蚕出ざる前のゆるかせの時と見るべし。愛笑にて少き女の意見へたり。今日辛勤自養蚕とハ、文のとをりにて、蚕の時節最中なり。平生は何の苦もなくやすき身なれども、今養蚕最中なれば、辛労多

しとなり。仍道不愍羅与綺、仍といふハ上の句を引受ていふ義なり。かく苦労して蚕を養へばこそ、羅綺に事ハ欠ずといふ。羅ハうすもの、綺は綾のたぐひなり。女郎初解織桑籃とハ、蚕業成就して莚桑籠など取かたづくを

解といふ。籃ハ籠也。

　　　蚕の徳にて福者となりし事

上州碓氷郡に、何某とかやいへる人、幼ふして父に離れ、母につかへて孝行なり。元より家貧しければ、朝夕のけふりも立かね、妻子とも飢寒に苦しミ、日をおくりける。斯てハ母をやしなふ手便もつき果、行末如何あらんと

つらつら思ふに、農民の大利を得ん事、蚕業にしくものなし、何卒養蚕の秘術を覚ヘ、毋妻子をも安穏に暮させばやと思ひ、夫より纔の畑に桑をうえ、近在近郷の功者にたより、蚕飼方の得失評判を見聞し、なをも日夜工夫を

こらし、様々にして、飼立けるに、五六年の間に天晴養育の手錬を得て、年々利潤を益し、年数纔のうちに大きに栄へ、山林田畑夥しく買求、上州高崎辺にて隠れなき富家となれり。是孝貞の徳によりてなせる所なり。

（図７３　蚕はじめの図

　今年より蚕はじめぬ小百姓　蕪村）

（図７４　糸祝いの図

　糸祝ひといふは、養蚕の、ことなく終ぬるを賀してものする事になん。されバ初花匂ふ比より、桑採る営に永き日を忘れ、郭公鳴や五月の短夜も睡を忍ひで、これが起伏に心を尽しわらうだかふるなど、身のいとまなきまゝに若き女といへど、裳高く掲げ、髪も楚を束ねし様にて、すべて誰の人ともわかれぬに、今日の賓客設けせんと、衣服調度など粧ひみやびかにひき繕ひたる気しきさへあるに、並居る人々に、餅高く盛て持出たる。始の恖しかりし姿とは、俄に目さむる心地ならせらる。今日まづ是をもて壽事ハ古へよりの例なりとぞ。やゝ盃とり出て、千たび百度めぐる程に、時移れど、猶どよめきつゝ夜の明るをも知らで興じあへるハ、尽せぬ宿の嘉びを唱ふ事にて、彼唐人の桑を種ること三十畝、衣食既に余り有り。時々賓友に会すといひけんも、斯る類ひにやとおほし。

養蚕秘録跋

予観歴史之所載或君有爽徳而失其道敷同

日奏罔功官不挙其職吏不奉其法因名位而

残害其下則無為民之父母之実而民受其禍

害何但桀紂之民而已哉労力而奉之而如是

為之下者不亦難乎予常歎曰我独芒而人亦

有不芒者乎頃予観此書喟然歎曰勉矣哉事

也可謂盡為下之道矣靖共而受功如是何但

堯舜之君而已哉労力奉事如是而為之上者

不亦易乎記曰誠者天之道也自誠明謂之性

婦人随其成心而師之誰独無師乎心誠求之

雖不中不遠夫一気所皷塊然為形五行為質

者受性生其自然也人惟万物之霊聴明作

元后々々民之父母也聖王臨於天下也事其自

然也其弁方正位體国経野設宦須職随其自

然也其兪允官人魏々文章煥乎成功随其自

然也夫土生物人資物而為業々以供事聖王

量能授事四民陳力受事朝無廃官野無游民

故曰上之治下也事也能有所芸者技也技兼

被事々兼被義々兼被徳々兼被道々兼被天

夫物固有形々固有名々当謂之聖人故知不

言無為之事然後知道之紀殊形異勢不与万

物異理可以為天下始聖王居民材必因天地

寒煖澡湿広谷大川異制民生其間者異俗剛

柔軽重遅速異斉五味異和器械異制衣異宜

修其教不易其俗斎其政不易其宜五方之民

皆有性不推移也五方之民皆有安居和味宜

服利用備器五方之民言語不通嗜欲不同達

其志通其欲食節事時民咸安其居楽事勤功

尊君親上其理自然也予因述者之請而書之

具瞻之君子読此書而顧吾言不啻観桑養蚕

之事矣

享和二年壬戌冬但馬国出石隠士関口源濂識す

　　　　　　　　　　　　　　　　印印

跋

先生之政域民築城郭以居之制盧井以

均之而無恒産因無恒心故制民之産楙

勧課農桑使仰足以事父母俯足以畜妻

子是以民陳力受職男務農殖女脩蚕職

若山林藪澤原陵淳鹵之地各以肥磽多

少為差賦入貢棐然後邑亡敖民地亡曠

土盖方今

昭代之化百姓繁庶衣食豊桁老者衣帛

食肉不饑不寒安衽席之上矣上垣生甞

使家人孜々於蚕繅之業且審詳於飼養

之術是雖婦女之生産亦王政之急務也

乃鏤于版夫世養蚕家取飼養之法於此

焉其必有益乎享和二壬戌初春

　　　　　　　　加藤為貞撰

　　　　　　　　　　印印